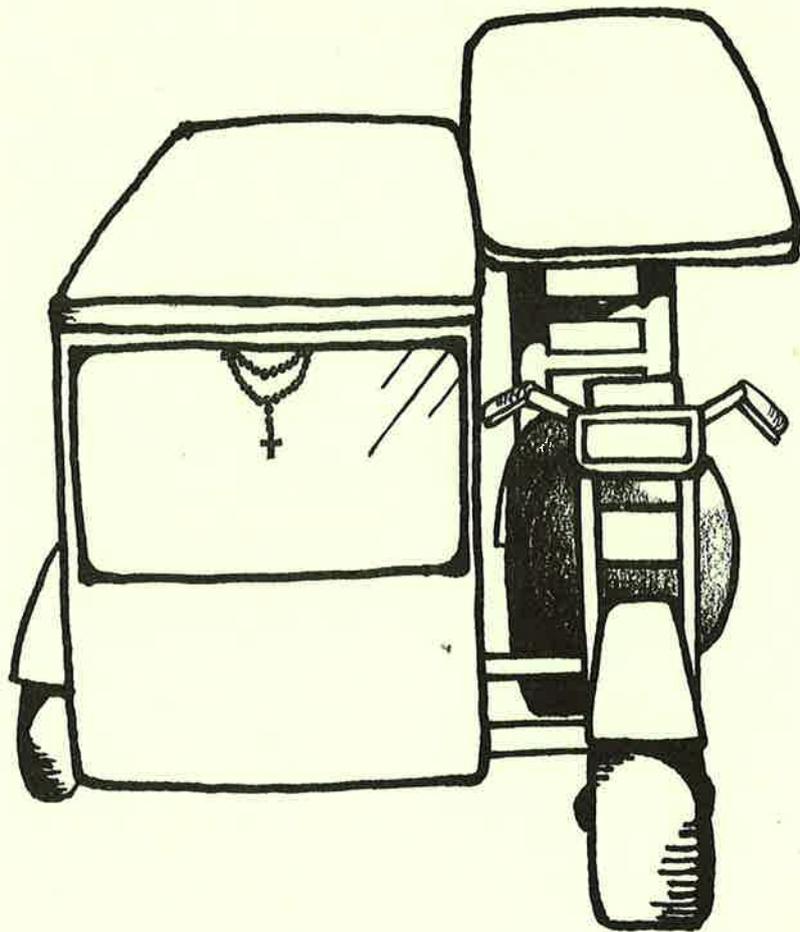


天理大学 第4回「国際参加」プロジェクト

TEREX '04

(Tenri University Relationship and Exchange project)

報告書



Tenri University
International Cooperation Project
A Report on the Tenri University
Relationship and Exchange project

目 次

報告書刊行に寄せて

| | | |
|-----------------------------|-------|--------|
| 天理大学長 | 橋本 武人 | -----1 |
| 天理大学地域文化研究センター長 | 井上 昭夫 | -----2 |
| 天理大学後援会長 | 豊田 千秋 | -----3 |
| 第4回「国際参加」プロジェクト TEREX'04 概要 | | -----4 |
| 本隊参加メンバー | | -----5 |
| 「国際参加」プロジェクト派遣前研修日程 | | -----7 |

第一部

| | | |
|---------------------------------|-----------|-----------|
| 1. フィリピン日記ー汗と涙の珍道中ー | | -----8 |
| 2. リコーダー指導 | | -----20 |
| 3. ホームステイ体験 | | -----22 |
| 4. フィリピンの食 | | -----23 |
| 5. 参加学生感想文 | | -----24 |
| 1) 「国際参加」プロジェクト報告 | 英米語コース | 2年 中村 まなみ |
| 2) MABUHAY! | 英米語コース | 2年 水谷 正考 |
| 3) I LOVE PHILIPPINES! | 英米学科 | 3年 仙波 佐知子 |
| 4) 人間らしさ | 英米語コース | 2年 坂上 典明 |
| 5) 初体験!! | ロシア語コース | 1年 暇 千賀子 |
| 6) 初めての海外が僕に感じさせてくれたもの | 英米語コース | 1年 井上 雅之 |
| 7) フィリピン研修 | 臨床心理専攻 | 1年 南 寛子 |
| 8) Maraming Salamat Po | スポーツ学コース | 3年 高木 宏明 |
| 9) 野田麻美がフィリピンで出会った・・・ | 天理教学専攻 | 4年 野田 麻美 |
| 10) 旅行じゃ出来ない3つの体験 | 朝鮮学科 | 3年 李 相雲 |
| 11) フィリピンでの活動を終えて | 臨床人間学(院生) | 1年 宇田 知功 |
| 12) 第1回から「国際参加」プロジェクトに参加し私が得たもの | 天理教学専攻 | 4年 西村 俊祐 |

6. 引率者の報告 39

1) 引率者の視点からー成果と課題を中心にー

天理大学地域文化研究センター兼任研究員 金子 昭

2) フィリピンではじめてのホームステイとリコーダー指導はいかがでしたか？

天理大学地域文化研究センター専任研究員 澤山 利広

3) フィリピンで思ったこと

奈良女子大学大学院人間文化研究科

博士後期課程

許 容敏

7. 国際参加プロジェクト報告書刊行に寄せて 44

天理教東本サンタローサ出張所代表 上田 和興

天理教フィリピン出張所長 山岸 精治

8. ハロハロの国フィリピンへ！ 天理教海外部 濱田 誠 46

9. リコーダーの出会い、そして・・・ 天理中学校教諭 米田 道治 47

10. 寄稿ー教学協働の教育プログラムへの期待 48

天理大学 庶務部長 安藤 勇作

天理大学 文学部長 仁尾 雅信

第二部 (資料編)

フィリピン地図、楽譜、賞状、各新聞記事、スピーチコンテスト原稿、etc

報告書刊行に寄せて

天理大学長 橋本 武人

天理大学の「国際参加」プロジェクトは、建学の精神の一環として日ごろ唱導する「他者への献身」を国際的なスケールで実践し、よって本学の教育目標として掲げる宗教性と国際性を同時に涵養する教育課程である。

本プロジェクトは、2001年大震災に見舞われたインド西部地区への救援活動として3年間続けられ、本年2004年より活動の舞台をフィリピンに移して遂行されたものである。もともと災害救援として始まったとはいえ、インドでのプロジェクトは義援金や救助物資を運び届ける類いのもではなく、貯水のための河川堰の建設や土囊ハウスの建築など、現地の人々が自立復興へ向けて必要とするものを、ともに汗して建設するところに特色を持たせたものであった。

このたびのフィリピンにおける活動は、1999年ピナツボ火山爆発の被害を蒙ったルソン島サンタローサ市及びアンヘレス市周辺で展開された。活動の中心は楽器など学用品に恵まれない小学校の児童たちにソプラノ・リコーダーを寄贈し、それを演奏する技術を教授し、最後に合奏を楽しむというプログラムである。

このプロジェクトに参加したのは12名の学生と引率の教員及びスタッフ3名の15名。まず寄贈するリコーダーを集め、教えるためには自らが演奏技術に磨きをかけ、親密なコミュニケーションをはかるため片言のフィリピン語を覚えるなど、事前準備も怠りなく、本年8月4日から16日までの13日間にわたって実施された。本書はその報告書である。

言葉も習慣も異なる文化圏に人々と実際に接触することによって、学生達は国際感覚を磨くうえで多くのことを学び、現地の人々に喜んでいただける他者への献身を通して、「人をたすける心」という宗教的心性の涵養も可能になる。また、貧しくとも純真で屈託のない児童たちとの交わりは、何かにつけ恵まれている自己自身を顧みる体験となり、物質文明が置き去りにしてきた心の豊かさを取り戻す契機ともなる。

今はまだ渡航先も限られ、参加人員数にも制限があるが、追い追い活動の範囲を世界の各地に広げて、宗教性と国際性を同時に伸ばすこのプロジェクトに、1人でも多くの学生諸君が参加できるようにしたいと思う。

終わりに、この「国際参加」プロジェクトの計画実施に当たって、ご支援ご協力をたまわった関係各位のご厚情に対して深甚なる敬意と謝意を表したい。

報告書刊行に寄せて

天理大学 地域文化研究センター長 井上 昭夫

天理大学再改革に向けて、2002年に地域文化研究センターが設けられた。センター発足と同時に3本の共同研究とアフガニスタン自立援助プロジェクト、そして「国際参加」プロジェクトがスタートした。今回のフィリピン・プロジェクトはインド西部地震被災地復興活動と称して行われた3年間にわたるインドプロジェクトについて第4回目の「国際参加」プロジェクトであった。

インドでは社会人を含む事前研修調査隊10名、第1回隊18名、第2回隊15名、第3回隊20名、第2回隊と第3回隊の間に学生ボランティアで行われた派遣隊7名を加えれば、学生44名、教員3名、社会人5名で総計52名になる。建設したボンガと言われる土嚢シェルターは計5棟、雨水を堰き止める幅約20数mのチェックダム1基、植樹した樹木は、現地で提供されたインド竹約1000本、天理より持参した孟宗竹20本、桜の木6本であった。加えて、現地の素材を利用して日本風の石庭を作り、そこにも孟宗竹と桜の木を植樹した。第1回隊が植えた竹は第3回隊によって3棟のボンガを繋ぐ屋根材の一部として使われた。いずれも40度を超す灼熱の太陽のもとで行われた肉体作業を伴う建築作業であるため、隊員は先ずもって水のありがたさを身近に体験し、インド人労働者のタフぶりに感心させられた。土砂を練り上げ、土嚢に入れ、充填された土嚢を1つ1つ両手で運び、積み上げ、叩き上げていく単純な反復作業を通して、ついに完成したドーム状のシェルターを見上げたときの達成感は、学生の心に生涯忘れがたい貴重な記憶をもたらしたにちがいない。

第4回隊は、インド隊が3年間の計画をほぼ達成したので、フィリピンを研修の土地とした。センターでは当初は中国の植林かインドネシアの井戸掘りが検討されていたが、事前調査を行う時間的余裕がなかったという理由で、それらの地域は第5回以後に行う候補地とした。そこで第4回目の「国際参加」プロジェクトは、新任の澤山利広教員が過去フィリピンで行っていた地震被災地にある小学校の教育支援活動の経験に基づいて、アンヘレスのマラバニャス小学校でリコーダー指導を行った。それに先立ちサンタローサにおいては学生たちはホームステイを体験した。

インド隊は、自然建築の思想を災害地域に活かした人道自立支援のための肉体労働に重きをおいた。現場には泥土による家屋も数多く存在する。大地に還るユニークな土嚢シェルター建築のプロセスにおいて、学生は古の人類の原初的泥土による住環境を想起したかも知れない。フィリピン隊は、音楽を通して国境と文化を越えた児童との感動を分かちあい、ホームステイを通して観光や文化学習とは異なる次元でのフィリピンの実生活の諸相に直接接触することができた。いずれも「国際参加」プロジェクトは貴重な体験知を提供してくれた。

最後にインド・フィリピン両地域におけるプロジェクトは、現地での天理教ミッションセンターの人々のご理解とご協力がなかったならば実現不可能なことであった。最後に本プロジェクトにさまざまに関わった人々と共に、厚く御礼申し上げる次第です。

報告書刊行に寄せて

天理大学後援会長 豊田 千秋

近年の地球環境の異常さは、目に余るものがある。日本においても、和歌山県沖や東北地方において、幾度となく地震が頻発し、また長期間続いた。台風も、観測至上最多の8回、本州に上陸した。南極、北極の氷は溶け出し、北米でも台風が暴れまわるよう事になった。

そんな中、本学の建学の精神を具体化した「国際参加」プロジェクトが、4回目を迎える事となった。参加する学生の顔ぶれは、年毎に変わることがあっても、目的とする事に変わりはない。天理大学は、天理教の海外布教者を養成するための、天理外国語学校が前身である。布教先の気候、風土等の知識を得るために、全国にも名を知られた図書館があり、参考館がある。天理教では「互い立て合いたすけ合い」と教えられるが、自分自身も相手も、互いの人格、その他を認め合って、相手を生かし、助け合っていくことだと思ふ。ただし、それは相手の見かえりを求めるものでなく、ただただ助かってもらいたいと、無報酬で尽くしていく事になる。これが、まわりまわっていつの日にか自分に返ってくる。誰かが、いつの日にか自分を助けてくれることになる。

このプロジェクトは、まさしくこの教えの実践であり、参加者の活動には頭が下がる思いである。

世界には、確かに経済をはじめ、いろいろな面で恵まれない国や地域が多い。しかし、人々は一生懸命生きている。今回、プロジェクトに参加した経験を踏まえて、今までと一味違ったもの見方ができるようになり、これからの人生設計に生かしていただきたい。また、国際交流、国際貢献にも目を向けていってもらいたい。それが後援会として微力ながらも後援させて頂いた値打ちとなる。これからの活動にも期待したい。

第4回「国際参加」プロジェクト TEREX'04 概要

天理大学の地域文化センターが主催する第4回「国際参加」プロジェクトにより、我々天理大学の学生12人、引率教員及びスタッフ3人は、8月4日～16日の日程でフィリピン共和国のルソン島を訪問し、さまざまな活動を実行してきた。我々は、国際参加を通じて「人間とは何か」ということを学ぶ機会を与えられたのである。参加学生12人の参加した動機についてはさまざまなものがあったが、このプロジェクトに参加することで学生皆が「人間とは何か」ということを考え、行動に移し、そしてまた考えるのであった。我々はこの国でもがき苦しみながら本当に素晴らしい体験ができたのである。

このプロジェクトは、天理大学の建学の精神である、国際性と他者への献身を具現化しようと、地域文化研究センターが毎年行っており(第1回は同センターの発足前)、今回で四回目を数える。前回まではインドを訪問し、図書館などをつくってきたが、インドでの活動を前回で完結させ、今回はフィリピンで実施した。

フィリピンでの主な活動内容は、フィリピン首都マニラの北西六十キロほどの所にある1991年のピナツボ火山被災地であるアンヘレス市を訪れ、同市の公立小学校のマラバニヤス小学校を訪問し、ソプラノリコーダーの指導をはじめとするさまざまな交流を持つ事であった。

同小学校は約千百人の児童が在籍しているが、教室数はわずか二十室程度。政府の手が行き届かないため、校舎には窓ガラスがなく、壊れたままの建物もある。教科書にいたっては何年間も使いまわされたボロボロの物を使用していた。教育体制が十分に整備されていないのである。特に音楽や体育などの情操教育には手が回っていない。そこに注目をし、今回の活動となったのである。

天理大学

国際参加プロジェクト

in フィリピン

参加メンバー



引率者

| No. | 氏名 | 所属 |
|-----|-------|---|
| ① | 金子 昭 | 天理大学地域文化研究センター兼任研究員 (天理大学おやさと研究所助教授) |
| ② | 澤山 利広 | 天理大学地域文化研究センター専任研究員 (天理大学国際文化学部助教授) |
| ③ | 許 容敏 | 奈良女子大学大学院博士後期課程 (人間文化研究科比較文化学専攻) |

参加者

| No. | 担当 | 氏名 | 所属 |
|-----|--------|--------|---------------------|
| ④ | リーダー | 西村 俊祐 | 人間学部宗教学科天理教学専攻4年 |
| ⑤ | サブリーダー | 高木 宏明 | 体育学部体育学科スポーツ学コース3年 |
| ⑥ | 遊軍 | 宇田 知功 | 臨床人間学研究科臨床心理学専攻1年 |
| ⑦ | 遊軍・保健 | 野田 麻美 | 人間学部宗教学科天理教学専攻4年 |
| ⑧ | 記録 | 仙波 佐知子 | 国際文化学部英米学科3年 |
| ⑨ | 記録 | 李 相雲 | 国際文化学部朝鮮学科3年 |
| ⑩ | 交流 | 中村 まなみ | 国際文化学部欧米学科英米語コース2年 |
| ⑪ | 交流 | 坂上 典明 | 国際文化学部欧米学科英米語コース2年 |
| ⑫ | 交流 | 水谷 正孝 | 国際文化学部欧米学科英米語コース2年 |
| ⑬ | リコーダー | 南 寛子 | 人間学部人間関係学科臨床心理学専攻1年 |
| ⑭ | 記録 | 井上 雅之 | 国際文化学部欧米学科1年 |
| ⑮ | 記録 | 巖 千賀子 | 国際文化学部欧米学科1年 |

「国際参加」プロジェクト派遣前研修日程

第1回目－6月22日(火)

- 16:20 オリエンテーション
・井上センター長挨拶、事業説明(健康管理、旅行手続き、他)、自己紹介、本プロジェクトの名称(愛称)について、役割分担(リーダー(班長)1、サブリーダー(班長)兼物品管理1、リコーダー指導2、記録(文章)4、交流(HS)3、遊軍2、保健1)
19:00 解散

第2回目－6月23日(水)

- 16:30 役割分担毎の打ち合わせ
18:00 リコーダー研修〔講師：米田先生(天理中学校教諭)〕
19:30 解散

第3回目－7月5日(月)

- 16:30 リコーダー研修〔講師：米田先生(天理中学校教諭)〕
18:00 フィリピン語研修〔講師：濱田先生(天理教海外部)〕
19:30 解散

第4回目－7月6日(火)

- 16:30 フィリピン語研修〔講師：濱田先生(天理教海外部)〕
18:00 準備
19:30 解散

第5回目－7月12日(月)

- 16:30 リコーダー研修〔講師：米田先生(天理中学校教諭)〕
18:00 準備
19:30 解散

第6回目－7月13日(火)

- 16:30 フィリピン語研修〔講師：濱田先生(天理教海外部)〕
18:00 準備
19:30 解散

第7、8回目－7月20日(火)、21日(水)

- 13:00 準備
16:00 解散

第9回目－7月23日(金)

- 16:30 準備
19:00 解散

第10、11回目－7月27日(火)、28日(水)

- 10:00 準備
13:00 解散

第12回目－8月3日(火)

- 15:00 結団式
16:00 事務報告(荷物分担など)
17:00 役割・班ごとに打ち合わせ、順次解散

フォローアップ研修

9月18日(水)

- 13:00 懇親会
15:00 写真交換、文集原稿提出

2005年2月1日(火)

文集原稿完成

第一部

1. フィリピン日記-汗と涙の珍道中-

8月4日 (水)

タイ航空で期待と不安を胸にいざ Philippine へ出発！！ 飛行機の中はドキドキ。昼すぎにフィリピンに到着（時差はたったの1時間）した後、天理教フィリピン出張所（マニラ）を訪問した。その際に、マンゴー100%ジュースを体験！ 早々にフィリピンをまのあたりにしてボルテージは上がる一方。そして出張所から約2時間かけてホームステイ先のサンタローサ市へ。まずお世話になる天理教サンタローサ出張所へ。そしていよいよ各自のホームステイ先へ。



参拝を済ませ、いざ出発！



出発直前の関空。リラックスしています♪



4時間後、無事マニラに到着



天理教フィリピン出張所を訪問



夕方、東本サンタローサ出張所に到着

Magandang gabi po (こんばんは)。



各自、ホームステイの家族と対面

8月5日 (木)

朝サンタローサ出張所に各自トライシクルで集結。みんな昨夜のホームステイ先でのできごとの話で話題は持ちきり。この日はサンタローサ中心部めぐりだった。サンタローサ市長を訪問したが、残念ながら市長は不在。その後の市場めぐりにはみんながビックリ。豚の顔が売られていた！うーん、おいしそう(笑)。次にお腹をすかしてお昼に寄ったのがフィリピンで有名なハンバーガー屋のジョリビー。おいしいー！そこでシップの味がするコーラにみんな苦戦。この後、バランガイキャプテン訪問の予定だったが、またしてもキャプテンが不在のため、各自ホームステイ先へ。



午前中、サンタローサ市役所を表敬



国民的英雄、ホセ・リサールの前で記念撮影



サンタローサ市場にて



フィリピンの生活の足、トライシクル



フィリピンではバスケットボールが大人気！！

8月6日(金)

午前中はエイベック・ハイスクールを訪問。ここでも事前に勉強してきたフィリピン語で自己紹介。通じた!(喜)交流会では、まず自分たちのリコーダー演奏。続いてフィリピンの生徒たちがダンスや歌を歌ってくれた。そしてグループごとに分かれてのおしゃべり、けんだま、折り紙など。交流会終了後フィリピンの子供たちからサイン攻めに!!フィリピンではOtso-Otsoというセクシーダンスが大流行中。えっ、こんなちっちゃい子も!?(笑)。こちらも負けじと坂上君筆頭に挑戦。子供たちからは大声援!このときからOtso-Otsoダンスというアイテムが加わった。午後は同校横の清掃ボランティア。“Let's clean Saint Rosa!!”子供たちも手伝ってくれて大変きれいになった。次に訪問したのがManPower Training Center(職業訓練学校)。そこでは熱烈な大歓迎を受けた。YOUKOSOという垂幕をはじめ、数々のプログラム、フィリピン料理も用意してくれた。みんな自分たちと同年齢くらいだったので意気投合。ゲームでは金子先生も登場(会場は大盛り上がり!)。交流会終了後、各自ホームステイ先へ。



Apex school を訪問。フィリピン語で自己紹介



自己紹介に現地の学生は興味津々



~It's a small world~

日本で練習してきたリコーダーを披露



昼休み、学生と一緒にバレーボール



その後、全員で学校付近を清掃



ManPower Training Center にて文化交流

8月7日 (土)

この日の訪問は PUP (college)。ここでの交流会ではなんといきなり貞子！？が出現！そうかと思いきや歌を歌い始めたり、劇も始まったりと数々のコラボレーション！ちょっとしたミュージカルのようなものを披露してくれた。あとはおしゃべりや記念撮影などなど。交流したクラスは英語の先生を目指す学生のクラスだった。英語めっちゃきれい（感心）！交流会終了後 PUP 横のフィリピンの庶民的な食事どころでランチ。ここでみんながお気に入りの煮込み卵に遭遇！（日本的な味付け）おいしすぎる。昼食後は各自のホストファミリーと楽しいひと時。この日の夜はサンタローサ最後の夜ということもあり何家族か合同でお別れパーティーをひらいてくれた。こちらもカレーライスをつくるなど食卓はフィリピンと日本のハーモニー。みんなで楽しく食べたり歌ったり踊ったりゲームをしたり。大ハッスル！…………この時間をもっと続いてほしかった…………。



ディスカッション中です。



得意の一発芸を披露します！



君も？ 実は、僕も教師目指してるんです



彼氏はどんな人なの？



2人の歌姫による熱唱 (Avril Lavigne)



私たちからの気持ちです♪

8月8日(日)

サンタローサ最後の日。朝いつものようにそれぞれのホームステイ先で朝食を食べて、家族たちにお礼のあいさつ(涙)。別れを惜しみサンタローサ出張所に集合。出張所にも最後の見送りのために各ホストファミリーたちがきてくれた。ここでお別れをして我々は一路アンヘレスへ。また戻ってきて再会するという固い約束をして・・・。アンヘレスに行く前に、マニラにある毎日新聞マニラ支局を訪問。ここでは支局長の大澤さんによるフィリピンの実情についてお話を聞くことができた。

→in Angels

夕方にアンヘレス到着！オアシスホテル(プール付)にて夕食、そしてミーティングへ。学生にこんな豪華ホテルってありかよ！？ by 水谷君



サンタローサ最終日。お世話になりました。



別れを惜しみ、涙するホストファミリー



各自、最後の記念撮影。ありがとう、サンタローサ。



アンヘレスへの途中、毎日新聞マニラ支局を表敬訪問



フィリピンに関する様々な質問がとびました



生演奏を聴きながら昼食(レストランにて)

8月9日(月)

とうとうこの日から5日間の地獄のリコーダー指導開始！！ 本来の目的であるリコーダー指導でどれだけ成果を出せるのか。期待と不安の狭間で悩みながらも、初日が始まった。2つのグループに分かれて指導にあたった。学年によって理解力の差はあるが、子供達に共通していることは、学ぶことへの熱意だったのではないだろうか。昼からは子供達との遊び、スポーツなどの交流タイム。しかし予定していたクラスの子は、雨が降って帰宅！（フィリピン七不思議の1つ）



今回の舞台、マラバニヤス小学校



先生、生徒による歓迎セレモニー



子供たちは私たちに興味津々



リコーダー指導を受ける4年生のクラス風景



笛の組み立て方からスタート



まずは音と指の使い方から

8月10日 (火)

2回目の練習。朝は学校の朝礼から始まる。教えている学年は、5年生と4年生で、クラスによって個性の違いがあった。ランチには家庭科の先生が作ってくれるご飯をいただいた。午後の行事では、**Japanese Art** ということので折り紙の鶴をみんなで折った。そしてこの日、ピロ兄（高木君）がダウン。ピロ兄のたった1人の戦いが始まることになった。



すごい、いろんな音のでてくる♪



「そうそう、ゆっくりやさしく吹いて」



「ドはこの指使い。そう、上手上手」



「男は気合で吹くんやぞ！」



子供たちの顔は真剣そのもの



先生も後ろでこっそり練習

8月11日(水)

3日目に入ってできる子とできない子の差が出はじめてきた。だけどみんな熱心にやってくれるので、疲れの出はじめて自分たちもその熱意に影響されてがんばれたと思う。午後の行事では、別のクラスでの折り紙講習会が開かれた。ホテルに帰ってからミーティング後に発表会の出し物練習が始まった。内容はリコーダーとダンスをやることに決まり！ Otso-Otso ダンスという手もあったが・・・



家庭科の先生が昼食を用意してくれました。



みんな、初めての折り鶴に挑戦

8月12日(木)

練習4日目。もちろん朝からの朝礼にも馴れてきて、カウントをとる太鼓のリズムに乗って踊る体操も板についてきた！ リコーダーについても最初の頃の不安も吹き飛び、あとはそれぞれのレベルで高めていくほどになったのではなかろうか。みんな先生という職業の大変さを身にしみて感じたと思う。しかし子供達の笑顔は途切れることなく、それがみんなのパワーの源であったと感じてやまない。昼からは Japanese Art 第2弾ということで、かぶとと紙鉄砲の製作でみんな楽しんだ。



難しいけど、できるかな・・・？



完成まであともう少し



やった、できたー！



次の日に向けてミーティング

8月13日（金）

明日はいよいよ発表会！ 教える私たちも、子供たちもドキドキ。と、同時に指導最終日ということもあって寂しい気持ちでいっぱいでした。明日の発表会にむけてのリハーサルで本番と同様に舞台にあげてリコーダーの演奏をやって、その子供たちの姿を見て泣くメンバーも数人。そして、子供たちの方も「今までありがとう」と号泣していました。でも、今日が最後じゃない！ 涙は明日、ラストの日にとっておかねばと気を取り直して、子供たちに「明日はベストを尽くすんだよ」と、士気を高めてこの日、指導は終了。やるべきことはやった！！！！



14日の演奏会に向けて最後の練習



教えるほうも必死です



子供たちがお礼に歌を歌ってくれました



演奏する姿、とても素敵です



子供たちから1人1人にプレゼント



子供たちの気持ちに思わず涙が・・・

8月14日（土）

いよいよ発表会当日。これが本当に子供たちと過ごす最後の、最後の日。発表会はフィリピンと日本の国歌斉唱から始まり、子供たちによるダンスなどが行われました。もうめっちゃかわいくてホレボレしちゃいました。そしてリコーダー演奏。子供たちも緊張して顔がこわばっていました。メンバーの指揮の下、4年生は「かっこう」、5年生は「聖者の行進」を演奏。もうどのクラスも立派に演奏することができました。終わった後、子供たちの顔から笑みが！！ もちろん私たちも。「本当にここまでやってきてよかった」改めて実感した瞬間でした。6日間ありがとう。あなたたちと過ごした日々は絶対忘れません！



発表会に用意するそうめんの準備



日本料理のお味はいかが？



開式に先立って国歌斉唱



フィリピンではこれが国歌斉唱のスタイル



いよいよ発表です。上手くできますように



5日間の練習の成果を見事に発揮！



日本の歌と踊りを披露



生徒たちも踊ってくれました



先生たちも負けていません



お世話になった先生方



どこの国でも、みんな写真が大好き



みんなで創った千羽鶴を贈呈



よく頑張ったね♪



各クラス生徒代表と記念撮影

8月15日(日)

この日は主に観光。まずは、ピナツボ火山やその被災地に行きました。ピナツボ火山のまわりに岩がたくさんあるなと思っていたら、それは岩ではなく灰だと知ったときには驚きました。それだけ被害が大きかったのだとその灰が物語っているようで・・・。そしてそのあとはショッピングモールでお買い物。CDを買う人もいれば、やたらとお菓子を買い込む人も。物価が安いぶんなんか得したき・ぶ・ん。みんな満足したことでしょう！



ピナツボ火山噴火から13年後の姿



今も教会の地面は火山灰です

8月16日(月)

今日は帰国の日。今日でフィリピンの旅もう終わりかと残念に思うところ。朝からマニラに向けて移動開始。道中はみんなお疲れのせいかわ爆睡していました。お昼に天理教フィリピン出張所で昼食をいただきました。その昼食がまたビックリ！日本にある某有名弁当屋のから揚げ弁当だったのです！お米も日本のお米だったし・・・世界は狭い。夕方にマニラ空港を出発して、夜9時ごろ帰国。本当に貴重な経験ができた旅でした。そしてみなさまご苦労様。いつかまたみんなでフィリピンに帰ろうね!!!



いよいよ最後の朝。滞在先のホテルを出発



お世話になった方々を訪れ一緒に記念撮影



多くの人に支えられた、大切な2週間でした。

2. リコーダー指導

ソプラノリコーダーの指導は一週間をかけて、午前に4、5年生の児童約160人を対象に行い、最終日には発表会も予定されていた。当たり前のことながら、約160人の生徒全員がソプラノリコーダーに触れることすら初めてなのである。リコーダーが楽器ということすらわからない児童もいたのではないだろうか。

そして、我々参加学生12人もまた、小中学生のとき、リコーダーには触れてきたものの指導者の立場になるのは初めての体験である。出発前本当に自分たちがリコーダーの指導をすることができるのだろうか、不安視する生徒も数多くいた。そのために我々は、出発2ヶ月前からリコーダーの指導の仕方や児童に教える曲の選出、現地語であるフィリピン語の勉強会など、研修を約20回程度行い、フィリピンでの指導に備えた。

ソプラノリコーダーを初めて手にした児童たちは、初めは戸惑いの表情を見せたものの、とても興味を示してくれた。指の使い方から指導した我々は、ここで、改めて無の状態から新たに有を生み出すことの難しさ痛感した。思っていたよりも児童たちの指の使い方はぎこちなく、予定していた内容を大幅にこなせていなかったのである。

4年生は「かつこう」、5年生は「聖者の行進」と日本での事前研修で指導する曲を決めていたが、初日の出来具合から本当に曲を吹けるところまで上達させてあげることができるのだろうか、新たに不安を覚えた。現地小学校の先生ですら苦笑いを浮かべるほどだったのだから。しかし、我々を救ってくれたのがソプラノリコーダーを手にした時の子どもたちの輝いた目であった。

初日を終え、我々は宿舎で早速初日の反省、今後の指導方法などについてミーティングすることにした。指導するに当たり我々は、二班に分かれて教室を回り指導を行っていた。そして、両班とも口をそろえて思っていたよりもできていないと報告した。初日のよかった点、悪かった点をあらためて把握し、2日目の指導に備えた。

2日目の指導を始め、新たな壁が我々を悩ませた。1日目の指使いをきちんと覚えており、見事なまでに音階を吹きこなす児童もおれば、全く指使いを忘れ、でたらめに吹いているだけの児童もいた。今後、後者の児童をどのようにして指導し成長させていくかに我々は悩まされた。しかし、その大きな壁は扉となり開かれていったのである。

3日目からは、指使いの指導を一通り終え曲の指導を開始した。しかし、曲の指導に関し

て指をうまく使いこなせていない児童たちはだいじょうぶであろうか、我々は不安を感じながら曲の指導を開始したのである。最初は、全員で曲を歌いリズムを覚えてもらうことから始め、ある程度どのような曲かを把握することができたら、問題であった指使いの指導を始めるのであったが、やはり、指をうまく使いこなし上手に吹く児童とそうでない児童はでてくる。

そんな中、前者の児童たちが後者の児童たちに指の使い方を我々と一緒になり指導してくれたのである。我々は感動を覚え、この子達を絶対に曲が吹けるようにしてあげ、発表会を完成させたいと強く思ったのである。

4日目も一緒になって指導してくれる児童のおかげでスムーズに曲を指導することができ、指使いがぎこちなかった児童たちもめきめきと上達していった。この調子であれば、2日後に控えた発表会は素晴らしいものになると我々は確信できた。

発表会を前日に控えた5日目は、リハーサルということで発表会会場である広場の舞台に立ちリコーダーを吹くことになった。初めはただでたらめにしか吹いていなかった児童たちが、舞台上で美しいハーモニーを奏でている。その様子を見ていた担任の先生が涙を流しているのである。初日苦笑いを浮かべていたのになら、ある。フィリピンに来て本当に良かった。この子たちに会えて本当に良かった。そう思える瞬間であった。

発表会では、リコーダー演奏の他にフィリピンの伝統的な踊り、低学年の生徒や先生方によるダンスなど楽しい時間を過ごした。リコーダー演奏にいたっては、アンコールを要求されるほどにまで好評であった。演奏が終わると成功したことへの感動と別れを惜しみ涙する児童が多くおり、我々も涙を流さずにはいられなかった。

ソプラノリコーダー指導の他に3、6年生を対象に縄跳びやスポーツ、折り紙などで交流を持った。特に、折り紙は好評で鶴や風船、かぶなどを喜んで作ってくれた。ここで我々が驚かされたのが、先生が自分の子供を勤務先である小学校に連れて来ており、私の子どもにも折り紙を教えてやってくれと授業に参加させていたのである。日本では考えられないこの状況に我々は戸惑いながらもフィリピン人の人柄というものを感じたような気がした。

3. ホームステイ体験

アンヘレス市での活動に先立ち、4-8日の四日間首都マニラから約30キロほどの所にあるサンタロサ市でホームステイを体験した。東南アジア系の国でのホームステイは天理大学では初めての試みであったが、とてもよい体験ができた。ホームステイ先の対象となったのはフィリピンのごく一般的な家庭で、ホストファミリーたちは異国から来た我々を本当の家族のように扱ってくれた。ホームステイによって、体当たりでフィリピンという国を感じる事ができた。

フィリピンでは、それが自分の家でなくとも、近所の家に出向きくつろいでいる姿をよく見る。ホームステイ先の各家庭では、ホストファミリーでない近所の人々までもが我々を歓迎してくれた。人間関係が希薄になった日本でよくささやかれる、古きよき時代の日本というものがそこにあるような気がした。

ホームステイでまず我々を戸惑わせたのが、トイレだった。フィリピンでは用をたした後、紙でふくという習慣があまりなかった。手と水を使い洗い流すのである。各自トイレトペーパーを持参していた。しかし、フィリピンの家で暮らしているのだからトイレトペーパーを使わずにフィリピン流の処理の仕方で用をたす学生もいた。皆が皆、自分たちの方法でフィリピンという国を感じていたのである。

ホームステイ期間中我々は同市の市場の清掃活動をした。日本ではごみを路上に捨てる事は悪しきことと認識されているが、フィリピンではそうではなかった。それが自分の家の前でも平気でごみを捨てるという“悪しきモラル”ができていた。そのようなモラルができていいるせいもあり、市場の状態はひどいもので我々は驚愕させられた。

清掃活動を開始すると、我々を驚愕させるもう一つの出来事が起こった。しかし、今度の驚きはとても喜ばしいものであった。清掃作業を見ていた現地の小学生たちが、我々の持参したごみ袋を手にし、清掃作業に参加してくれたのである。子供たちにとっては、日本人が何か物珍しい事をしているので興味をそそられたのかもしれない。理由はどうであれ我々は彼らの行動に感動し、彼らがフィリピンに根付いた悪しきモラルを改善してくれることを願うのであった。

同市でも、高校や大学を訪問するなどのさまざまな交流を持った。学生に限らずフィリピン人は日本という国にあこがれを抱いていた。学生達は将来日本で働きたい。ホストファミリー達は日本人の暮らしなどにとっても興味を持っている。そして、フィリピンで走っている車やバイクのほとんどが日本製のものであった。国際化と騒がれている今日であるが、日本を出てはじめて日本と世界との距離が分かるものである。日本におればフィリピンは、ハワイなどの観光地に比べあまり訪れる機会のない、距離以上に遠い国のように感じる。しかし、日本に出稼ぎに来ているフィリピン人は数多くいるし、我々の食べているバナナはフィリピン産で、フィリピンで走る車は日本産、とても身近な国なのは確かなのである。一昔前、韓国を近くて遠い国といていたが、フィリピンもそうなのではないだろうか。いや、フィリピン以外にも近くて遠い国は数多くあるだろう。日本人は他の国の人々が自分たちをどう思っているのかはとても気にするのに、自分たちが相手はどう思っているかはあまり気にしない。そのような自分中心の状況が近くて遠い国をつくるのではないかと我々は、数日ではあるがフィリピンで暮らし、現地の同世代の学生達と交流を持ってみてそう感じたのだった。

4. フィリピンの食

フィリピン料理のルーツはフィリピン独自のもの、スペインの植民地時代に入ってきたもの、中国料理とのミックス、また日本領時のものや、アメリカから持ち込まれたものがあり、フィリピンの食文化は東洋・西洋・中華が混ざり合ったものといえます。フィリピンの食事は本当においしかったです！！！！

フィリピンではご飯を手で食べる（カマヤン）というスタイルが伝統的ですが、私達のホームステイ先ではスプーンとフォークを使う家庭も多かったようです。また、それらを使うときにはスプーンをナイフの代わりに使ったり、フォークでご飯やおかずをスプーンの上にのせたりしてきれいに食べていました。執筆者も実践してみましたが意外に難かったです。手で食べる場合は、親指以外の指をスプーンのように軽く曲げ、そこに親指で食べ物をのせて器用に食べます。使った手はお皿に入った水で洗います。

フィリピンの家庭ではご飯とともにスープがよく出てきます。そのスープをご飯にかけて一緒に食べるのがフィリピン流です。スープは一度にかけないでご飯の端からスプーンで少しずつかけて食べました。

フィリピンの安くて、まいう～な生鮮食品はスーパーではなく、市場にありました。屋根があるだけの屋台にずらりと並んだ食品のなかには、日本では見かけない魚（テラピア、バゴス、その他いろいろ）がたくさんありました。お肉は大きな斧のような包丁でぶった切っていて、横を通るときは恐ろしかったです。市場の中はうるさいくらいにぎやかで人々の熱気と活気がみなぎっていました。

フィリピン人の好きな食べ物といえば、ずばり、ハンバーガーでしょう！！ どこに行ってもジョリビーというハンバーガーショップがあり、フライドチキンやピザ、スパゲティなどがあつたり、フィリピンらしいのはご飯が包み紙に入って出されたりしました。時間帯に関わらず多くの人でにぎわっていました。とてもボリュームがあつてマサラップでした！！



5. 参加学生感想文

1) 「国際参加」プロジェクト報告

中村 まなみ



「海外ボランティアをしてみたい。」という思いからフィリピン行きを決めました。研修期間中は、本当に子供たちにリコーダーを教えることが出来るのか、ホームステイはやっていけるのかという不安を抱きながら挑んでいました。そして、8月4日。不安と期待を胸に日本を立ちいざフィリピンへ。この日からサンタローサ市でホームステイが始まりました。家に行くまで緊張していましたが、玄関口で家族みんなが私の到着を待っていてくれたのを見て、一気に緊張がほぐれました。この家族だったら絶対に大丈夫だと。私が家に居るときは、「体調は大丈夫か」、「昨夜は眠れたのか」、「日本にいる家族は心配していないか」など、とにかく気を遣ってくれ、また市場に一緒に行った際には、見る物見る物が珍しいので「これ何？」と聞くと、「説明するより経験が大切」と言ってそれを買って食べさせてくれたりと、私に喜んでもらおうというもてなしに本当に感激しました。たった4日間という短い期間ではあったけれど、大変充実したものであり、人と人の深いかわりについて多くのものを学びました。

そして、本題のリコーダー指導の始まり。初めてリコーダーを手にした子供たちの目は輝き、初めてリコーダーで演奏するという好奇心、喜びにあふれる姿を見て私はフィリピンまで来た甲斐があったと実感しました。そのとき不安はなくなり、「完成させたい！」との思いになっていました。日に日に子供たちは上達していき、最初のころは指使いが出来なかった子供が「見て！出来たよ」と挙手をして教えてくれたり、指使いが分かる子が分からない子に教えてあげる光景などが見られるようになりました。指導最終日、リコーダー発表会を前日に控えリハーサルで本番同様、舞台にあげて演奏させたあとで、子供たちが吹けるようになった喜び、そして、小学校で過ごす日々が終わる寂しさが込み上げて溢れる涙を止めることが出来ませんでした。それを見て子供たちも泣き出し、その泣いている子供たちを抱きしめた瞬間、「本当にフィリピンに来てよかった。みんなにあえてよかった」と心の底から思いました。次の日の発表会も無事に終わり、先生方からも大変喜ばれ、子供たちも満足してくれ、このプロジェクトは大成功に終わったと思います。このリコーダー指導を通じて感じたことは、リコーダーに関する成長はもちろんのこと、他の面で成長、例えば一つのをやり遂げる楽しさや大切さを知ったり、他の国の人々と触れ合うことがどういうものなのかを味わったりする、こういった成長を促してきたのではないかと思います。このような素晴らしい体験が出来て本当に、本当によかったと思います。ホームステイのおかげでフィリピンには帰る家があります。またいつの日か、できればプロジェクト参加者でまたフィリピンに行くというのではなく、フィリピンに「帰る」というかたちで戻りたいと思います。

2) MABUHAY!

水谷 正孝



デリー、ダーウィン、ジュンジュン、アレン・・・・・・うーん、数えきれない。自分は今回のフィリピンプロジェクトで、いったいどれくらいの人々に出会ったの？ サンタローサの市役所で楽しく会話したおじさんたち。ハイスクールでごみ拾いを手伝ってくれた少年たち。ロビンソンというショッピングモールで迷っていると、自分が行きたいところまで向こうから案内してくれたおばさん。こうしたちょっとした出会いを含めたらフィリピンでの約2週間はすさまじい数になる。もし今回のフィリピンプロジェクトに参加していなかったら、これらすべての人とのすてきな出会いはなかった。フィリピンで自分が撮った写真をみても、そこに写っている1人1人が自分にとって宝物である。

また今回のこのプロジェクトには非常に多くの人々によってなりたっている。参加したメンバーの学生、先生、フィリピンで直接お世話になった天理教の出張所の方々だけでなく、日本全国各地からフィリピンの子供たちのためにリコーダーや遊具を送ってくれたみなさん。また資金を援助してくださった後援会の方々。日本でフィリピン語、リコーダーを教えてくださいました濱田先生、米田先生、最初にこのプロジェクトにかかわったすべての人に感謝したい！ ありがとうございます！！

自分は今回フィリピンへ行くにあたって自分なりに目標を3つたてていた。1つ目にはどんな事にも積極的に絡んでいくこと。休憩時間や1人での時間があるならどんどん現地の人にふれあってこよう！ 自分はこれを現地でどんどん実践した。どんな事にもしゃり出て挑戦。フィリピンの食べ物でもダンスにしても、外から眺めているのではなくて、どんどんすべてにトライ！ 自分のこの体でフィリピンを感じとろうとした。こうやっていたら自分自身がホントに積極的な人間になってきたし、フィリピンの文化も体で体験できたしまさに一石二鳥。1つ目の目標達成！

2つ目には、日本語は最小限にし、フィリピン語、英語を自分自身使っていこう、と決めた。自分は大学で英米語専攻なので今回は語学の面でもたいへん勉強になった。2週間だけだったけど、自分でも英語力が向上できたことが実感できた。2つ目の目標達成！

3つ目は、“心の交流”。実はこれが1番したかったこと。初海外で日本語の通じない人々と理解しあうには“心”しかない。国、言語、肌の色、宗教、を超えての交流をめざした。こう決めてはいたが、自分でも何が心の交流かが分からないし、どうするとできるのかも実際分かってなかった。そういうものをしたいという思いはあった。でもフィリピンで活動しているうちに心の交流っていうのは頭で理解することではなく、自分の目の前にあるものを、そのまま素直に自然に自分自身に受け取ることだと感じとってくるようになった。フィリピンの人々の、子供たちの心からの笑顔、今でも心に残っている・・・・・・忘れることはできない。そして自分も今まで見せたことのない笑顔になっているのに気づいた。リコーダーを教えたある男の子が、最終日のお別れの時に自分の所にやってきて、笑顔で自分にくっついてきたとき、自分は心の交流ができたと感じた。この子は授業外の昼休みにもリコーダーを教えてほしいとやってきた子で、自分でも思い入れが強かった。そのときの喜びは言葉では表せない。自分なりに3つ目の目標達成！

最後に、フィリピンの抱えている問題は確かに大きい。学校へ通えない子供たちの数。排気ガスだらけの道路。女性に関する問題。こういう問題をじかに自分の目で見た。一番大事なことは、自分が今回のプロジェクトで得たことを今後どう活かすか！ だと思ふ。ひとつといえる事は、この2週間は間違いなく自分の今後の人生に大きな影響を与えてくれた。ありがとう！ サンタローサ、アンヘレス、フィリピーノ！！ **SALAMAT!!!**

3) I LOVE PHILIPPINES!

仙波 佐知子



明るくて、冗談好きで、大らかで、おおざっぱ。私が見るところ、フィリピン人は皆そんな感じでした。時計はすべてばらばら。宴会を開けば、近所の迷惑なんて気にするどころか夜中まで大音量でカラオケ。私はいい加減な人間で、実は日本より居心地が良かったかも。

空港に着いて、「マニラ！」と叫んでいる先輩を横目に私もわくわくしていました。バスに1時間ぐらい乗ってサンタローサへ。さっそく4日間のホームステイが始まります。私の家族は両親と、私達くらいの年頃の3兄妹で暮らしていました。お父さんは足が悪く、子供達3人が夜働いて家計を支えています。一番上のお兄さんは日本で1年間働いていたそうです（実習中、そんな人にいっぱい出会いました。海外労働者の仕送りがフィリピンのGNPの何十パーセントも占めると

聞いても納得でした。それで彼らにとって日本は、私達が考えているよりずっと身近な国なのです）。

4日間はあっという間に過ぎてしまいました。甘酸っぱい料理は美味しかったし、買い物にもホストシスター達と一緒にいったし、地元の高校・大学にも訪問したし、いろいろ楽しかった。そんな風に、フィリピンを観察し、慣れることで、きたる次の1週間に備えました。

さて、ホームステイのあとが私達の本番です。小学校で子供たちにリコーダーを教えました。その日々は、きらきらした思い出で、どの場面も子供達の笑顔と笑い声が一緒です。今回ほど人気者になったのは初めてでした。校庭を歩けば、どの子も私の名前を呼んでくれて、“GIVE ME FIVE!”であいさつしました。それから、頼まれたサインは数え切れないくらい（もちろん、私だけでなく、他のみんなもそうです。金子先生だって、通称、Dr. AKIで負けてなつかたです）。そして、大変だったけど、充実感と達成感を味わった笛の授業！子供たちの前で大きな声で説明して、教室をまわって1人ずつ見てあげて……。同じパターンの繰り返しの中で、毎時間ごとに反省・試行錯誤、もう一つのグループを見習ったりして、新しいことは何でもやってみました。

メンバーの大学とは違う一面を見られたことも嬉しかったことの一つです。踊ったり、冗談したり、その場のノリでフィリピン人をすぐ惹きつけてしまう先輩・後輩たち。彼らの才能ともいえるおもしろさのおかげで旅が何倍もおもしろくなったし、授業でも大いに助けられたのでした。彼らを見て、人と交流するうえで一番大切なのはその人の態度や個性や魅力なんだと、当たり前のことですが、改めて実感しました。

今回でたった一つ残念なことといえば、小学校での1週間があまりにも短かったことです。雨が降ったら帰ってしまう子供達や明らかに年上や年下が混じっているひとつの学年。謎はたくさんあるのに、それらは解けないままです。あるクラスをずっと授業参観した先生によると、算数と国語の間に切れ目はないし、お弁当を食べている生徒もいれば教室掃除をしている生徒もいるそう。そんなおかしな光景、自分の目で確かめたい（笑）。それから、どうして子供達はあんなに英語が流暢に話せるんだろう？ マラバニヤス小学校にもう1回行って、3週間ほど滞在したい気持ちでいっぱいです。最初にも言ったとおり、私はフィリピンが大好きだし、あとはトイレさえマスターすれば住めるんですから！

最後になりましたが、おこづかいを一生懸命やりくりしてボールを買ってくれた女の子や笛をはじめ様々なものを小学校に寄付して下さった皆さん、このプロジェクトに関わったすべての方々、本当にありがとうございました。リコーダーは私たちが帰った後も、授業の一環として使われることになったそうです（仲良くなった現地の先生がメールで教えてくれました。それを聞いてとても嬉しかったです）。それから、まだ国際参加プロジェクトに参加したことのない天大の皆さん、卒業するまでに是非一度、参加してみてください。きっと、自分にとって、何かのきっかけになる、すばらしい体験になると思います。

4) 人間らしさ

坂上 典明



感謝、感動...私の心を表すことのできる言葉が他にあるだろうか。いや、ないだろう。そう、まさに感謝と感動の旅だった。本来人間同士がコミュニケーションのために使う「言葉」、その「言葉」さえも超えた心と心のコミュニケーション。そこまで言い切れるほどの熱い旅をぼくらは繰り広げてきたのだと、今になっても感じる事ができる。数えきれないほどの人たちとの出会いと、つながり。唯一の言葉は、ありがとう。

フィリピンの空港に降り立った。雨季であるため湿気が多く、また独特の匂いを体を感じた。臭かった。さすがにフィリピン、私の期待を裏切らない。この臭さの原因は後になって解かることになるのだが…

まず、アジアの国という安易なイメージから、日本とは水の質が違い、腹を壊すということは前々から言われていて、覚悟を決めてやって来たのだが。実際、水には気をつけて過ごしていたが、ホームステイの時などは全力で生水を飲んでいて。しかし、ほとんど腹をこわすことはなかった。自分はフィリピン気質か、という疑い?もあったが、本当に神様に守られているなど感じた。海外の旅は初めての経験であり、そこでホームステイができたことは貴重な経験になった。そこでもっとも心に残ったことは、水を大切にすることと、人を大切にすることだった。人間が生きていくために欠かすことのできない水を、普段どれだけ自分は無駄に使っているのかと思うと悲しくなってしまった。私の家族の家(フィリピン)では、シャワーがない。そのため、井戸から水を汲んできて体を洗い、顔を洗い、歯を磨いていた。蛇口をひねれば当たり前のように水が出て、あったかいお湯も出て、そんな自分の生き方がここでは当たり前ではなかった。自分は同じアジアの人間だけど、文化も生活も違う国から来て、そんな人間を家族の人達は心から受け入れてくれた。また、近所同士のつながりの強さを見ることもできたと思う。フィリピンでは、親戚で同じ地域に住むということがあるが、それ以上に近所同士のつながりの強さは、そこに住む人達み

んなが、家族とちやうの?!と感じてしまうほどであった。水を大切にすること、人を大切にすること、この二つは自分がこれからの人生を歩んでいくのに、改めて心に刻んでおく必要があると感じた!

おっと、すっかり書き忘れるところでした。今回の目的である、リコーダー指導についてです。でも、このことについては、みんなしっかり書いているだろうから、私は特に小学校の子供たちについて書きたいと思います。フィリピンの子供たちは元気です。元気過ぎます。どこからそのパワーは来るのですか? とにかく、子供たちの学ぶことへの姿勢は、自分のやる気を駆り立ててくれたことは言うまでもありません。リコーダーという、全く見たこともない未知の物体を手に取り、あれやこれやと一生懸命に取り組んでいた子供たちの姿を忘れることはできません。また、教えることの楽しさを感じることができました。うるさいクラスや、真面目なクラスなど、それぞれのクラスの特徴があったけど、熱心に取り組む姿勢、そして元気が有り余っていることは、みんなに共通して言えることでした。そんなパワフルな子供たちの、発表会本番での超緊張した姿は、これまた忘れることのできないことでもあります。その超緊張した姿を見ているクラスの先生の涙を見ると、自分が一生懸命に教えて、伝えようとした努力は、子供たちや、他の先生にも伝わったのかなと感じることができました。

人間らしさについて考えたことはありますか? 今回の旅では、その人間らしさを心で感じることもできたのだと思います。それは、人間が「心」を持っている生物であり、その「心」にある優しさや、感謝の気持ちを相手に伝えることができることであると勝手に思っています。でも普段、「物」が溢れている世界に生き、その「物」に頼って生きてしまっている自分にとって、そのことを実感することは簡単なことではなくなっているのかもしれない。フィリピンでは、その人間らしさをホームステイや、学校で出会った現地の人達とのふれあいを通して気づかせてもらえたことが、自分にとって大きな宝物になったと感じます。フィリピンの空港に降り立った時に感じたあの臭さは、フィリピンの人々の強い絆から発せられていたのではないのでしょうか。今でも聞こえてくる、あの小学校の朝礼での子供たちの歌声、アコ〜フィリピ〜ナス、アコ〜フィリピ〜ナス...

5) 初体験!

囁 千賀子



「今、この時点が終わりではなく、始まりなのです。」そう、このプロジェクトを支えてこられた先生方は口を揃えておっしゃられる。経験したからこそその言葉であり、学生への愛情・期待が感じさせられる言葉でもある。

自分自身を新境地へ導くためのステップとして「国際参加」プロジェクトに参加した。大学に入り、ずっと続けていたバスケットをやめ、それに伴ってだらだらと毎日過ごすようなことだけはしたくないと思っていたが、特に何もなく過ぎる毎日の中で「このまま何事もなくいいのか」と考えるようになった。物足りなさを感じたのだ。やるならとことん、自分にも他人にもためになることをやろうと思い、参加を決意した。“今まで自分が経験したことのないようなことに挑戦する。”これもまた参加を決意した理由の一つだ。

出発日当日から4日間、初の海外にして初のホームステイ。先生は「現地に慣れるためだ」と言うけれど、本人は緊張で変な動き、そわそわ。しかし、初日が夜だったからこそ戸惑いもなく、意外にすんなりファミリーになれたのかもしれない。

しかし困難は訪れる。フィリピンの言葉は地域によって違いがみられ、公用語として英語が使われている。教育現場でも小学校から英語が必須だ。フィリピンに比べて、中学校からの英語教育をおろそかにしていた私にとって、フィリピンの人との会話能力は限りなくゼロに近い。しかし不思議なもので、伝えようと努力すると解ってくれる。顔の表情、身振り、手振り。特に用意していった良かったと思うのが、ノート。わからない英単語、聞いてみたいこと、絵を書いて説明したり、時には似顔絵を書いて遊んだりもした。

ホストシスターである ATE DEBO は 21 歳にして既に結婚していて、子供が 2 人いる。日本語に興味があるらしく、「日本語を教えて!」とよく質問してきて、いくつかの単語を書き残してきた。ホストブラザー (兄) である KUYA DEX は 24 歳で、近々日本に働きにくる予定だ。もう 1 人のホストブラザー (弟) D・J は 17 歳でもう働いている。床が竹でできている 2 階にいつも居るのがホスト祖母 LOLA。フィリピンでは高齢者への制度が整っているわけでもなく、家族がお年寄りを養う。家族内での発言力は年上が持っている。そして、女の人は大体 16 歳で大人の女性と見なされ早くに結婚する人が多い。子供が多いのもカトリックで避妊しないことが少なからず関係していると思われる。多くの人が生

活を助けるために諸外国へ働きに出ていて、庶民の生活はその人たちからの仕送りで成り立っている（毎日新聞社マニラ支局大澤支局長の話より）。KUYA DEX もこれと同じ。この国全体が仕送りで成り立っていると言っても過言ではないだろう。私がお世話になった家の内部は、日本とあまり変わらない印象を受けた。しかしびっくりしたのが、護美箱がないこと。ごみはというと、ちりとりの中か家の外へ。道路を歩けばいつもごみが目につく。現地の生活にも大分と慣れ、日が経つにつれてコミュニケーションもある程度とれるようになり、冗談も笑い飛ばせるようになった。この4日間で、「現地に慣れるためだ」と言った先生の言葉が改めて身にしみた。フィリピンの生活、家庭、問題、人間性の傾向。全てを知るには至らないが、今後につながる情報のつかみになることばかりであっただけでなく、家族として温かく受け入れてくれたフィリピンの人達の心を見たような体験だった。

さて次は、メインの目的地・マラバニヤス小学校。先生や子供たちとご対面。毎朝フラッグセレモニーと国歌、体操に始まって、午前中4コマのリコーダー指導。昼食をはさみ午後はジャパニーズアートの時間が2時間。昼からの時間は予定外の申し出によって折り紙を教えた時間が全体の半分以上だった。午前中の授業では、どのクラスも決定的な差はなく、前日のリハーサルはどのクラスも見事なものだった。発表会では余裕を持って子供たちは臨むだろうと私は思っていた。しかし、発表会当日の朝の子供たちの顔と云ったら、これ以上ないぐらいの緊張まくった顔で登場。緊張で失敗してしまったのか、舞台の上で泣き出してしまった子もいた。発表会は無事成功に終わり、ほっと胸をなでおろしたのも束の間、もう小学校を離れてしまう時がきた。最後には、小学校の先生方皆で歌を歌ってくれて、私たちと一緒に手をつなぎ、輪になって互いに“ありがとう”と言って幕を閉じた。

このプロジェクトで、自分が考えていた以上の現実を目の当たりにした。フィリピンの現状は庶民の生活である。その生活を体験できたホームステイ、音楽の授業や体育の授業に手が行き届いていない学校教育に直接携わった小学校でのリコーダー指導。自分にできることは何だろう。日本以外の国のことを真剣に考えたことは今まで一度もなかった。参加を決意した理由とは結果的にかけ離れているが、あの思いがあったからこそ籠の外を見られたと思うし、これから自分ができることを探してやっていけると思う。このプロジェクトを私の出発点としてこれからも励んでいきたい。

6) 初めての海外が僕に感じさせてくれたもの

井上 雅之



何もかもが初めての体験であった。サンタローサでのホームステイ、海外の学生との交流会、アンヘレスでの地元小学生に対してのリコーダーの技術指導、そして、フィリピンへ、海外へ飛び立つことすら私にとっては初めての体験だったのである。その初めての体験の場がフィリピンであった事を私は幸せに感じる。海外というものをもまったく肌で感じたことの無かった私にとって、今後、海外への旅行や、生活がもし行われることになれば、すべてこのフィリピンが基準となるだろう。それくらいに、フィリピンという国は、海外をまったく知らなかった私に、とてつもない衝撃を与えてくれたのだ。

何度も言わしてもらっているが、私にとって、このプロジェクト（第4回「国際参加」プロジェクト）が初めての海外への渡航であった。このプロジェクトに参加した理由としても、海外を早く知りたいと言う思いが応募理由の大半を占めていた。私は生まれて18年間海外と言うものを知らずに生きてきた。そんな私にとって、日本以外の国に出かける、あるいは触れ合うことが不安であったし楽しみでもあった。しかし、現地に着くと不安など何処へ行ったのか楽しい事ばかりであった。

フィリピンという国を、文面や言葉で説明されてもイメージがつきにくかったが、フィリピンで2週間だけであるが、生活をしてみて、フィリピンと日本について考えさせられる事も多くあった。

フィリピンの人々は日本という国に憧れを持っていたし、現地で走っている車やバイクはほとんどが日本製である。フィリピンにいても日本を感じる事ができたし、こんなにも近い関係にある国なんだと感じさせられた。それなのに私は、フィリピンの事をまったく知らなかった。そんな自分が今までもったいない生き方をしてきたのだと感じた。

自国を離れてみれば本当に考えさせられる事が多い。私はまだまだ海外渡航初心者。これからは、今までのもったいなかった生き方を色々な国を訪れ、色々な事を感じ、経験し、余りある生き方をしていきたい。初めての海外フィリピンは自分をそう感じさせてくれた、ありがとう。

7) フィリピン研修

南 寛子



「7520円です。」おつりを握った瞬間、今買ったばかりの大きなトランクと共に店の出口へダッシュした。出発当日になって、不運にもいきなりトランクがぶっ壊れた。私は泣きそうになりながら、真新しいトランクの中へ溢れんばかりの荷物を詰め込んだ。

フィリピン空港に降り立った。空気のおい、湿度、太陽の照り方、ゴチャゴチャして不揃いな町並みに、大勢の人々。真っ白の歯にキラキラした瞳、端正な顔立ち、1人1人よく見るとフィリピーナは綺麗だと思った。とにかくすべてが私にとって新鮮だった。

私はフィリピン語はおろか英語もほとんど話せなかったの、1人でホームステイするのは不安ではなかった。しかし、ホストファミリーは大変暖かく私を迎え入れてくれた。次の日から私のフィリピンでの生活が始まった。午前中は研修のみんなど活動し、午後は家族と過ごした。日本から女の子が来たという事で、毎日沢山の人が会いに来てくれた。すごく嬉しかったし、みんなは異国から来た私に親切だった。だが、話したくても自己紹介以外はほとんど何も話せない。暗記していたはずの英単語が、いざ話すとなると、頭の中から消えていく。沢山の感謝の気持ちと、それを伝えきれない申し訳なさを抱きながら、ただ笑顔で表す事しか出来なかった自分を悔やむ。しかし、毎日何度も何度も私に会いに来てくれた3歳の女の子、ジュネーヴは私がお風呂から出てくると、いつも髪をといでくれた。私はその子からコミュニケーションの方法は言語だけではない事を教わったような気がする。夜になると、毎日の様にバイクに乗せてもらい、フィリピンの町をドライブした。ライトで照らされた教会や澄み切った星空が本当に綺麗だった。

後半はこのプロジェクトのメインである、小学生にリコーダーを教えるという行事だ。リコーダーを珍しそうに手に取る子供たちは本当に嬉しそう、こっちまで嬉しくなるほどだった。日に日に上達していく子供達を見ていると、絶対発表会までには上手く吹ける様になって欲しいと思う様になった。つたない英語で繰り返し繰り返し、指で反芻しながら教えた。発表会当日、全く吹けなかった子供達が驚くほど上手になっていて、子供の力はすごい事を知らされた。一生懸命吹いている子供達を見ていると、演奏の途中なのに涙が出てしまった。フィリピンへ来てよかった。私は心からそう思った。

2週間はあっという間に過ぎた。私はこの旅で、自分の無力さや、価値観の相違、貧富の差といった数々の現実を見た。同時に人々のやさしい笑顔や日々の営みから、何か忘れかけていたものを思い出した気がする。今でも私は大好きなホストファミリー、バイクで見た星空、リコーダーを教えた子供達の澄んだ瞳を忘れずにいる。閑空から家へ戻るバスの中、行きに買ったトランクの代金は滞納していた電気代だった事を思い出し、電気が止まっているであろう冷蔵庫の中のアイスを不憫に思い、急に現実に連れ戻された気がして、私のフィリピンの旅は終わった。

あの子達は今でもリコーダーを奏でてくれているのだろうか。

8) Maraming salamat po

高木 宏明



今回参加しようと思ったのは、前回のプロジェクトとは違った体験が今回でき、異国の文化や抱える問題を勉強できると思ったからです。前半にホームステイ、後半はリコーダー指導と文化交流ということで、どれも自分にとっては初めてのことでした。

最初の4日間はサンタローサにあるそれぞれのホームステイ先で過ごしました。私のホストファミリーは両親と娘(7歳)という家族構成。日本では末っ子の私に初めて妹ができました。私のことを「kuya (クヤ) = お兄ちゃん」と呼んでくれ、とても嬉しかったです。一緒にバスケットボールや折り紙をして遊んだり、算数を教えてあげたりしました。また、日本に住んでいた事のあるお母さんとは、日本での思い出や、夫や娘、この街についてなどの話をしました。お父さんはとてもやさしい人で、私が卒業して戻ってきたらフィリピンを案内してあげると約束してくれました。日本とフィリピンの違いは、フィリピンではご飯を手で食べます。私も家族と同じようにフィリピン式で食べていました。これは全然抵抗が無かったのですが、トイレットペーパーを使わずに手で洗うというフィリピン式のトイレだけは最後まで挑戦できませんでした。次にフィリピンに行くときはやろう・・・かな？

サンタローサ滞在中には現地の学校などを訪れ、同年代の生徒との交流をおこないました。みんなすごく明るく、日本のことにすごく関心を持ってくれてとても有意義な時間を過ごしました。

サンタローサからアンヘレスに移動し、6日目からマラバニャス小学校でリコーダー指導と交流事業をしました。リコーダーでは指のおさえ方から始めました。最初はもちろん上手く音が出せないでいましたが、子供の能力はすごく、5日間の練習で演奏ができるまでになりました。みんな夢中で吹いていて、純粹に取り組む姿は私たちも見習わなければならないと思いました。授業最後に子供たちは歌を歌ってくれ、アクセサリーをプレゼントしてくれました。その時子供たちが泣いていたんですが、その涙がすごく素敵で、ちょっともらい泣き・・・。

交流事業ではポートボール、大縄とび、折り紙などをしました。中でも折り紙が大好評。一緒に折り紙を折り、完成すると子供たちは大喜びでした。

最後の3日間、私は体調を崩し入院してしまい、リコーダー発表会と市内観光などに参加できませんでした。しかし、変な話ですが入院して良い経験をしました。入院中、多くの方におさづけをしていただきました。天理教をよく知らない私は、正直それまでは「祈ったからってどうなるの?」と思っていました。しかし、おさづけの度に体が楽になったのを実感した時、その力を知りました。宗教の素晴らしさを入院によって学ぶことができました。

今回のプロジェクトで仲間も増え、家族も増えました。また、多くの温かい人と交流したことで今まで自分がアジアの国々を「同じ地域の国々」として見ていたつもりが、実は「発展途上の国」という上下関係のような見方をしていたことに気づきました。今回の経験は、将来の自分に大きな影響を与えることになると思います。

今回お世話になった現地の方々、引率の先生方、ありがとうございました。そして、ずっと一緒に活動してきた心優しいみんな、ありがとう。ホント感謝しています。

9) 野田麻美がフィリピンで出会った・・・

野田 麻美



今回、私が参加した国際参加プロジェクトは、ホームステイと現地の小学校で、リコーダーを教えるというものでした。プロジェクト内容を知り私は、音で人と人が繋がるなんて、すごお〜く素敵な事だなあとと思い、参加を希望しました。

いざフィリピンの地に足を...。とても暑い！！ 梅雨のようなジメジメ！！ じわじわっとくる汗。これが最初に感じたフィリピンです。

ホームステイは東本大教会の上田先生のご協力で4日間ありました。私がホームステイした家の主レティママは、天理教とキリスト教を信仰する元気なおばあちゃんです。家の敷地内にはレティママの娘、息子、その子どもたちも住んでおり、とてもにぎやかでした。私が、みんなの家に遊びに行くと必ず私の大好きな BEATLES の曲を大音量にして、紅茶に菓子を出してくれるのです。フィリピンの人たちには、おやつ時間が絶対にあると聞いていたので、あつ、これかあ〜つと何故か嬉しくてニヤけてしまいました。また、ホームステイで1番、大変だった事は W.C. です。便器に便座がなく苦労しました。流す時は水洗ではないのでバケツに水をくんで流すという用法でした。さらに一般の家庭では紙を使わないので困りました。けれどもフィリピンの人々の生活を味わえ、日本との生活の違いを比較することができて良かったです。

私たちの本当の目的を実行する小学校は、想像していたよりも大きく、生徒も多くてビックリ！しました。リコーダーの練習は5日間で行い、リコーダーを一から教える事は、とても難しく時間もかかり、嫌になる事もあったけれど、子ども達のキラキラな目に救われました。本当、音楽って言葉が分からなくても、気持が伝わり、心が繋がるものなんだなあと感じました。

最終日のリコーダー発表の日、私はとても複雑でした。なぜなら、子供達は何もわからないままで、5日間の練習が始まり、個人差もではじめ、全員が完璧でない状態。そんな中での発表、子ども達の顔がいつもと違い緊張感が伝わってきて、みんなの顔を見ていられなくなりました。演奏が始まると子供達の一生懸命な姿に涙がボロボロでてきてしまいました。その演奏は、完璧ではなかったけれど、最高に beautiful sound でした！！ 演奏後の子供達の満足気な笑顔にまた、涙がボロボロでてきてしまいました。子供達にリコーダーを教える事は、決して楽ではなかったけれど、私達が真剣に伝えれば、相手も真剣に答えてくれるんだなあと思いました。すごく良い時間を子供達と過ごせて良かったです。私は、大学生活の最後にこんな体験ができて本当に HAPPY です。大変お世話になった先生方に感謝いたします。あと、12人の仲間にイキナガガラック・キタン・マキララ！！

10) 旅行じゃ出来ない3つの体験

李 相雲



今回の「国際参加」プロジェクトで、私は3つの大きな体験が来た。題名どおり旅行では決して味わえることのない、国際参加ならではの体験であった。

初めての対面で、通じぬ言葉・家族皆で同じ部屋での就寝、何もかもが初体験だった私にとってホームステイは凄かった。私がよく耳にするホームステイは、たいていヨーロッパの地域であって、東南アジアでのホームステイというのはあまり耳にしない。今回のプロジェクトで私が一番興味を抱いたのがフィリピン・ホームステイだった。確かに東南アジアというのはヨーロッパに比べて治安が良く思われず、ましてや大学の行事でアジアにホームステイというのは一大事であるということに参加者一同、引率者や学校関係者の雰囲気を見て感じていた。天理大学には現在アジア学科という学科があるが、アジアの国々ではホームステイを行っていない。ヨーロッパ・アメリカ学科では行っているようだ。そのようなことから、今回のホームステイは大学にとっても大きな第一歩であるということを知り、私はそのプロジェクトの一員であれたことが嬉しく、また個人的にも素晴らしい体験をすることが出来たと思っている。何よりもフィリピンという国に、もう一つの家族が出来たことが何よりの宝物になった。

次に今回の目的でもあったリコーダーの指導は、達成感というものを感じさせてもらった。日本でも指導者という立場になったことのない学生たちが、フィリピンで必死に1つのことを教えている。それも言葉が通じず、身振り手振りのジェスチャーで、はじめて吹くリコーダーから1つの曲までを目標にと。引率者はもちろん、リコーダーの授業は学生皆が本当に頑張って、指導に励んだ。吹けるようになった子も、吹けないままの子も、最後は皆で発表会。フィリピンの子どもたちも、私たちも一生懸命頑張って、みんなで1つのことを完成させた。大変だった1週間、最後は本当に涙でいっぱいだった。小学校での1週間は本当に大切な思い出になった。

3つめの体験は、団体行動の際の1人1人の行動がとても大切であることを学べたことだ。今回のようなプロジェクトの際に、決して1人では何も出来ず全員でやり遂げることが重要で、1人でも道をそれるとそのプログラムは成功しない。2週間のフィリピン滞在中に肌で感じることを出来たことは、これから社会に出て行く私たちにとっては大きな収穫になったことは間違いないだろう。

最後に、今回のフィリピンプロジェクトで私は本当に素晴らしい引率者と、そして本当に楽しい学生たちと2週間を過ごせたことが何よりの思い出になった。決して楽しいばかりではなかったが、本当にやりがいのある「国際参加」プロジェクトであったと思う。

1 1) フィリピンでの活動を終えて

宇田 知功



ある時にふと目にとまった、前回のインドプロジェクトの写真。それらの写真を目にしたとき、半信半疑ながらも「このプロジェクトに参加する」という思いが心の奥にあったことを憶えています。正直、活動の地がインドではなくフィリピンであること、活動の中心がリコーダーの指導であることを知った時にはやめることも考えました。やめることを考えながら応募し、面接を受け、いつの間にか研修を受けている自分に気がつきました。今思うと、そのようなフィリピンに向けての流れがあまりにも自然すぎて、辞めることができなかつたのだと思います。

私は出発の直前からある病気にかかってしまい、出発2日前には一度、不参加という決断をしました。しかし明るる日の出発前のミーティングの日、突然の回復に恵まれたことで一転、参加をもう一度決心することになります。このような両極を行ったり来たりという動きは、現地でも続くことになります。

なんとか参加にこぎつけたものの、全快ではないため前半4日間のサンタローサでのホームステイはやめておいたほうが良いと思い、休養させてもらうことを先生方にも相談していました。このプロジェクトの主要目的はリコーダー指導であることを考えると、ホームステイはできなくてもプロジェクトにはそれほど支障がないのだから、後半のリコーダーの活動に参加することの方が大切だと考えてのことでした。しかし、その決断もホストファミリーの方に会った瞬間、一転してしまいました。挨拶だけでも、とって会った瞬間に、ここでホームステイを断ることは自分の気持ちに反することに強く気づかされました。今まで経験したことのない生活がここにあると思っただけで、断ることなどできませんでした。そして、自分にこのような未知のものに対する好奇心があることも新鮮な驚きでした。その後のプロジェクトの活動に支障がでるかもしれないという不安を押してでもホームステイするという選択をした理由はそれだけで十分でした。それからの4日間は心身ともに大変ながらも、充実した濃密な時間を過ごすことができました。最終日にはとうとう力尽きて寝込んでしまうことになりましたが、ホストファミリーの方も家族の一員としてとても心配してくださり、ホテルや病院ではなく、“家族”に見守られて療養できたことは幸運だったと思えます。すこし表現がおかしいかもしれませんが、そのような恵まれた

環境にあったからこそ、心おきなく体調を崩すことができたのではないかとさえ思います。

サンタローサを発つときには皆が別れを惜しみ、涙も見られました。たった4日間という短い時間でこれほどまでに人と人は近づくことができるのかという素朴な驚きとともに、いいようのない寂しさを感じていました。

後半のマラバニャス小学校での活動はホームステイよりもきついスケジュールの中、完全な体力勝負となりました。午前中に4限、午後には2限、ホテルに帰ってミーティング。前半はメンバーがバラバラに過ごすことがほとんどでしたが、今度はメンバーそろっての活動。先生方も含め、皆個性の強い十数名でのミーティングや活動。予定通りにことが進まないという苛立ちと、日々の疲れのなかで、ミーティングがうまく進まないというようなことが生じてくるのも仕方のないことでした。それでも誰一人として問題を投げ出すことなく、初日から問題が浮き彫りにされたことで、逆にその問題を軸にしてメンバーの和が生まれてきたのだと思います。

この間、再び出発前の病気が再発し、心配をかけてしまうことがありましたが、皆の思いに支えられ不思議と快方に向かい大事には至りませんでした。しかし、残念なことに途中1名が体調を崩し、活動に参加することができなくなりました。1人を欠けたままの活動は思ったより大変で、メンバー1人の重さというものを強く実感することになりました。

小学校での活動の最終日、誰も正確なプログラムを知らないという日本ではありえないような適当さが漂う雰囲気の中で、歌や踊り、そしてリコーダーの演奏が順に行われました。自分たちの教えたクラスの演奏は、見ていて自然と顔がほころんでしまいました。

一緒に帰国できるかどうか心配されていた1人のメンバーも、出国時には合流することができ、最良の形でプロジェクトの全てを終えることができました。後半の活動で体調を崩し回復に向かいながら「今無理をしない方がいいのではないか」という不安に襲われたときにも、“今できることを今する”というメンバーの姿勢に支えられ、結果、最後まで活動に参加することができたのだと思います。またそのような姿勢で活動できたからこそ、反省することは多くあれど、後悔することなくやってこれたのだと思います。

残念ながら参加することのできなかつた1名を含め、メンバーに支えられること、教えられることの多かった今回のプロジェクト。メンバー1人ひとりに感謝するとともに、このメンバーで活動することができたことに感謝します。そして、引率の先生方、現地で活動を支えてくださった方々、ホストファミリーの方々、大学関係の方々に感謝します。

1 2) 第 1 回から国際参加プロジェクトに参加し、私が得たもの

西村 俊祐



今回の「国際参加」プロジェクトは、私にとって、4度目の参加となりました。インド、フィリピンで、私は日本では考えられない貧富の差を目の当たりにし、宗教、文化の違いを体で感じて、日本や自分の周りのことだけでなく、世界に目を向けるようになりました。そして、このプロジェクトに参加したことで、現在の先進国と呼ばれる国々に富が集中し、途上国と呼ばれる国々が貧困に苦しむ世界の構造に、矛盾と憤りを感じました。他人事ではなく、自分のことのように思え、私にも「何かできることはないか」、むしろ、「何かしなくては」と思えるようになりました。また、自分が恵まれた生活をしていることに感謝するようになりました。

インド、フィリピンの人々と共に活動し、生活する中で、言葉や宗教、文化、国の違いを越えて、人と人は心が通じ合えることを知りました。そして、天理教の教えである、「世界一れつ兄弟」の教えを改めて実感しました。また、このプロジェクトの理念である、「他者への献身」に基づいた活動の中で、人のために尽くすことの喜び、人のために尽くし、自分が成長していく喜びを味わいました。

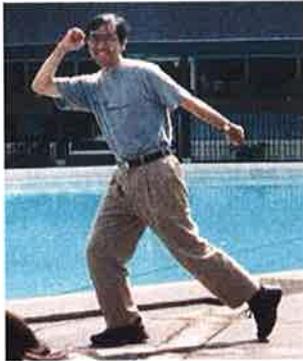
私は、1回生の時から4回生の今に至るまでこのプロジェクトに参加し、ただ大学に通って講義を受けるだけでは、絶対にできない体験をさせてもらい、充実した大学生活を送ることができました。また、このプロジェクトでの体験を通して、色々なことを学び、色々なことを考えさせられて、自分自身を見つめなおす事が出来ました。私は人として大きく成長させてもらい、自分の将来の目標まで見つけることが出来ました。私は、このプロジェクトに4年間参加できたことを誇りに思っています。そして、この素晴らしい「国際参加」プロジェクトを企画し、4年間、さまざまな貴重な経験と、知識、アドバイスを下さった井上先生、このプロジェクトを陰で支えて下さった、おやさと研究所、地域文化研究センターの先生方に、心から感謝します。

ありがとう。

6. 引率者の報告

1) 引率者の視点から-成長と課題を中心に-

金子 昭



はじめに

フィリピンでの第4回「国際参加」プロジェクトは、私にとっても大変印象深く、有意義な体験であった。2週間近くの間、外国で学生諸君と寝食を共にしながら活動するというのは、15年にわたる教員生活で初めてのことであり、教室では見られない学生たちの生き生きした姿に接して、こちらも大きな元気をもらった思いがするのである。

本稿では、とくに引率者の視点から、今回のプロジェクトの成果や反省点、これからの課題について考えるところを述べてみたい。

1. 成果

「国際参加」プロジェクトは、教学協働と他者への献身を二本柱とした海外ボランティア実習である。今回、前半ではサンタローサにて現地の天理教東本出張所関係者の方々の協力を得ながら、現地の家庭におけるホームステイの交流を深め、後半はマラバニヤス小学校でのリコーダー指導という「技術移転」も成功し、この二本柱は確実に達成された。

まずホームステイでは、何よりも学生たちが文字通り家族の一員として、各家庭の中に溶け込むことができ、フィリピンを身近に肌で感じてもらうことができた。また交流活動についても、エイペック・ハイスクール、職業訓練学校、PUPとの充実した交流を行うことができた。

そしてマラバニヤス小学校での活動においては、リコーダー演奏指導の所期の目的を達成し、演奏会を成功させた。リコーダー350本はじめスポーツ用具等の寄贈もできた。折り紙やスポーツ指導も、語学の壁や雨天等の問題を乗り越え、学生の創意工夫により、うまくこなせた。学生たちが積極的に子供たちの中に飛び込み、熱心に指導している姿に連日接し、私は正直深い感動を覚え、天大生をあらためて見直したものである。

学生たちにとっての(また私自身にとっても)最大の収穫は、フィリピンの人々からあたたかい歓迎を受け、心尽くしのもてなしを受けながら、濃密な人間的交流ができたことであろう。今回の活動は、おそらく学生生活で最も感銘深い思い出になったのではないだろうか。

2. 成果の要因

このような成果が挙げられたのは、何よりもまず現地の天理教出張所(マニラ・サンタローサ)、現地NGOのUCFによる支援態勢が充実していたからである。また今回、アンヘレスでの活動では、リコーダー指導という企画が完成された型としてあったため、その型に即した形でこれを実行することが可能であった。そして各3回にわたるリコーダー研修・フィリピン語研修を含め、事前研修に時間と手間をかけたことが挙げられる。

12名のメンバーも、互いに足りないところを補いあい、助け合いながら、チームワークを達成できた。英語がとくに傑出してできた者がいないために、かえってそれが良い結果をもたらした。各人がそれぞれ努力して子供たちとの交流につとめることができたからである。このメンバーは同窓会を開けるほど、深い結びつきができたように思う(実際、帰国翌々日には全員が揃って打ち上げ会を開

き、2次会はカラオケ大会になった)。

学生と引率者の関係も、概してきわめて良好であった。引率者3人態勢で臨んだため、学生へのケアはかなり行き届いたと思う。とくに学外からの女性スタッフは、本学出身の大学院生の許容敏さんをお願いしたのは大正解であった。メンバーの中にすぐに溶け込み、カメラマンとして活躍し、また教員と学生の間を取り持つなど、献身的に尽くしてくれた。

3. 反省点

もちろん反省点がなかったわけではない。ホームステイでは、ホストファミリーの好意もあったが、学生たちが町内を離れた遠出をしてしまい、出張所で予定されていた活動に参加できないという一幕もあった。このあたり調整は難しいだろうが、原則は堅持してほしいところだ。

マラバニヤス小学校では、当初予定されていたボンガが建設できなかった。現地での止むを得ない事情(毎日のように降るスコール、午前4時間午後2時間のタイトでハードな時間割をこなすので精一杯だったことなど)もあるが、担当学生と引率者の連絡不備があり、道具がその場で揃わず、両者の間でいささか気まずいやりとりもあった。

連日の活動で体調をくずす者も出てきた。これは、精神的・肉体的な過労が大きな原因なので、各自じゅうぶん気をつけていただきたいと思う。元気になったと思っても、活動には徐々に復帰するぐらいが良い。引率者としても、今後はそのように指導したい。

4. これからの課題

何よりもまず、各自が自らの体調管理をしっかりすることが大切である。自分の体力を過信せず、しっかりと休養を取るように。2週間にわたる濃密な交流や活動は、引率者にとっても得難い充実した体験ではあるが、それなりに負担もあるのも事実である。今後は、活動期間の短縮、活動内容の軽減なども視野に入れるべきであろう。

次に、口頭伝達には行き違いや間違いが少なからず発生してしまうことが挙げられる。文書やメモ、あるいは複数のメンバーで復唱するなど、確認態勢をしっかりすべきであろう。「言った」「言わない」、あるいは「聞いた」「聞いてない」は、禁句にすべきである。また指揮系統もあいまいにしない一方で、とっさの事態にも柔軟に対応できる姿勢が望まれる。

第3に、緊急時の対応について、現地スタッフとの密接な協力関係が不可欠であることを、あらためて痛感した。また、女子学生の参加もあるので、たとえ病院に入院などという緊急事態がなくても、女性スタッフの参加はぜひとも必要である。教員と学生とは立場の相違から溝が生まれやすいが、両者の間を取り持つ役割の方に加わっていただくことで、グループ全体が和やかな雰囲気になり、一手一つの力を出せることが分かった。

おわりに

先述したように、「国際参加」プロジェクトは、海外ボランティア実習という意味で1つの教育プログラムとしての位置づけを有している。学生たちは皆口々に、またフィリピンで同じ活動をしたいと言ってくれた。これは、とても嬉しいことである。しかしながら、これだけが海外協力ではないし、もっと他の国や地域でもなすべき支援活動がたくさんあるはずだ。学生諸君はこのレベルで満足するのではなく、今回の活動を通じて得た体験知や問題意識を大切にしながら、今度はそれぞれが次なるステップに踏み出してほしい。

2) フィリピンではじめてのホームステイとリコーダー指導はいかがでしたか？

澤山 利広

TEREX (Tenri University Recorder & Exchange Projectの略) '04は、「教学協働」による「他者への献身」を目的としたフィリピンでの「国際参加」プロジェクトです。「教学協働」とは、教職員と学生が天理教学と他の学問との学際的交流を基盤に、共通の目標の達成を目指す国内外での実践活動です。このような趣旨に基づいて4月と6月にフィリピンに赴き、現地事前調査を行いました。各方面の協力の得られる目処が付きましましたので、学内で募集・広報・選考を行い、13名をTEREX'04のメンバーとしました。出発前にはサンタローサのバランガイ（最小行政区）の人々とアンヘレスの小学生の笑顔の思い浮かべながら事前研修や準備作業に励んできました。残念ながら1名が出発直前の発熱で不参加となってしまうしましたが、研修と事前準備段階での彼女の貢献を忘れることはできません。

フィリピンではその成果を遺憾なく発揮することができたのではないのでしょうか。サンタローサでは、フィリピン人学生との交流会やジプニー乗り場でのゴミ拾い、そして各自がホームステイ先で家族の一員として何らかの役割を担いました。私もホームステイをしながら市井の人々の生活を垣間見ることができました。特に印象に残っているのは、天理教出張所の方々に同行して家庭訪問をさせていただいたことです。糖尿病で体の自由が利かないおばあちゃんや男手のない一家を支える老婦人の声に耳を傾ける布教の姿に、助けを必要とする人々の心に寄り添うことの大切さに気づかされました。

アンヘレスでは連日、予期せぬ事態が展開する中で、現地の人々の参画も得て、無事に発表会を終えることができました。国際協力に従事したボランティアは、よく“I got much more than I could give.”と言いますが、今回のプロジェクトでもこの言葉を実感しています。

学生メンバーの皆さんは、それぞれのテーマを持ってフィリピンに赴きました。21世紀最初の夏のオリンピックの最中に実施されたTEREX'04が、4年毎に人の輪の拡大と自己の成長を振り返る原点になっていれば嬉しい限りです。

最後に、リコーダー等をご提供いただいた方々、後援会、学内外の皆様のご支援ご協力に感謝いたします。引き続き、本プロジェクトへのご助力を賜りたくお願い申し上げます。



3) フィリピンで思ったこと

許 容敏



第4回「国際参加」プロジェクトに、スタッフとして参加し、短期間ではあったが、フィリピン人家庭でのホームステイ、マラバニヤス小学校におけるボランティアなど、後世忘れられない貴重な体験をさせていただきました。

そのときに考えたことを、少しばかり述べてみたいと思います。

言葉の壁を超えて

フィリピンに出発する前の日、台湾の友人から「フィリピンに行くの、あそこは治安が悪いよ。気をつけてね」という電話がありました。私は治安については、それほど不安は感じませんでした。それよりも気にかかっていたことは、言葉が通じない場合どうしたらよいだろうか、ということでした。フィリピン語もさることながら、英会話も自分では不十分だと思っていたからです。

でも、私の後輩にあたる学生の皆さんのケアをするという責任もあり、皆と同じようにホームステイをすることも大切なことだ、と感じたので勇気を出すことにしました。

前半4日間のホームステイ初日は、さすがに不安でした。どうしたらよいのでしょうか。だが、案じることはありませんでした。一家の主は、今年66歳になるおばあさんで、息子夫婦と孫娘の5人家族です。おばあさんは表側の部屋に1人で住み、息子たちは奥の小さな部屋に住んでいるのですが、私がいる間おばあさんは息子のところで寝泊まりしていました。

面白いもので、日常の生活は笑顔と身振りで何とか通じます。が、やはり言葉の壁は厚く、高齢者の問題とか、環境問題とか、家族のことなどをうまく尋ねることができませんでした。

司馬遼太郎の『街道を行く』シリーズに『台湾紀行』がありますが、これを読むと 司馬さんは台湾に取材に行くにあたって、台湾に関する文献・資料を徹底的に集めて読まれたということです。私もフィリピンに関する資料をいろいろと読むべきであった。またタガログ語を、もう少ししっかりと学んでおくべきであったと、あらためて考えた次第です。

フィリピン人の生活

私が宿泊した家は、付近にある家より比較的綺麗な家でした。その家はおばあさんの部屋もシャワー室も清潔ですが、息子たちの部屋を見たときは、ちょっと驚きました。ベッドは1つだけ、部屋の中は裸電球で薄暗く、机も筆筒もないのです。家族の服は、紐に掛けてぶら下がっています。

私は、孫娘と友達になるため、彼女の髪をお下げに編んであげることになりました。私は来日前、美容師をしていましたし、今でも技術には自信があります。こういうところから家族の皆さんと親しくなれるかな、と思いました。一所懸命に櫛を入れても、髪がもつれてしまい、なかなかとけません。それでも力を入れて、何度も何度も梳いたところ、やっとうまく編みあがりました。そのときの私の喜び、そして孫娘たちの嬉しそうな顔と言ったら！ それは本当に可愛いものでした。こうした小さな出来事などから、私はフィリピンの家庭生活の一端を垣間見ることができたのです。

1992年(平成4年)5月、台湾政府はタイとインドネシア、フィリピンからの労働者の入国を許可しました。台湾では、特に幼児や老人の世話をする15歳から20歳前半のフィリピンのメイドさんは、今や不可欠な存在となっています。フィリピンの若い娘たちが外国に出稼ぎに行く理由も、なるほどなあと、少し理解することができました。

学生たちの真剣な活動

後半の活動のため訪問したマラバニヤス小学校では、教室は狭い上に、窓もガラスではなく、窓枠にただ幅の狭い、薄い木の板を何枚も斜めに並べたものでした。しかも、壊れたところは補修もされていません。薄暗く空気も蒸し暑く澱んでいるので、教室に入った途端に汗が滲みでてきます。私は写真撮影を担当しつつ、学生たちの体調にずっと注意していました。

学生たちは、汗びっしょりになりながら、一所懸命にソプラノ・リコーダーの指導をしているのです。みんな本当によくがんばっている。「一所懸命がんばっている姿ってとても素晴らしい、本当に美しい姿だなあ」と、心から感動した次第です。

フィリピンの言語教育

フィリピンの住民は、ピザヤ、タガログ2部族をはじめ、背の低いアエタ族などを含めると、数十種を数え、言語は八十数種にのぼる多言語国家といわれています。学校教育、特に小学校の教育は何語によって行われているのだろうか。フィリピンと同じく多言語国家である台湾に生まれ、台湾の高齢者の言語学習に関心をもつ私にとっては、とても関心のある問題です。

フィリピンは、16世紀以来スペイン領、米西戦争の結果、1901年にはアメリカ領となり、1946年にはフィリピン共和国として独立しました。アメリカの統治下で教育が目覚しく普及したことはよく知られています。アメリカ領になってからは、フィリピンにおける小学校教育はすべて英語で行う方針となり、小学校をでていれば誰でも英語が使えるように、ということでありました。現在は、英語とフィリピン語(タガログ語を基礎としたもので、1937年に国語として承認された)で授業が行われています。

私は、マラバニヤス小学校では英語の授業だけを参観しましたが、1・2年生の授業には生徒は黒板から単語を写すだけで、先生の説明は何もありません。3年生になると、全員が英語の授業を受けることになるようです。地理・歴史のテキストはフィリピン語、授業での説明はできるだけフィリピン語で行います。ただし、英語・数学のテキストは英語、授業での説明は英語で行っています。

教育言語をフィリピン語に限ったということは、言語を統一し、共通語を築きたいという強い意志の表れです。また、英語教育をアメリカ領時代より継続してやっているのは、フィリピンでは科学技術はもちろん文学、立法、行政等、情報のほとんどすべては英語を知らねば接近できないという状況にあるということ、また国際化時代に必須で欠くべからざるものであるからであります。

台湾の場合は、「郷土言語」を次の世代に継承するために1991年以後は、小学校1年生から中国標準語(北京語)と共に、閩南語、客家語及び原住民の言語を各自が選択して学習することになっています。フィリピンと台湾とでは、言語教育がこれほど違うことを知り、とても参考になりました。

私は、大学院では、台湾の生涯教育のテーマについて取り組んでいます。フィリピンでの具体的事例について触れることができ、台湾と比較したりして、おおいに刺激になりました。今回のプロジェクトを通じて、はからずも、多言語国家における言語教育問題について考える機会を与えて頂きました。このことを深く感謝しています。

7. 「国際参加」プロジェクト報告書刊行に寄せて

天理教東本サンタローサ出張所代表 上田 和興

現代の日本人、取り分け若い人々にとってアジアの国々の中には、身近な存在ながら、日本人にとってはあまり関心のない国が多いように思われます。今夏、サンタローサに天理大学の学生さんがホームステイをしたいと聞き、耳を疑いました。こんな所に超文化的な生活をされている学生さんを迎えられるだろうかと思ったのであります。金子先生、澤山先生の柔軟な国際感覚に敬意を表します。

私たちは十年前に始めてこの地を訪れ、布教を開始することになりました。二箇所に出張所を設け、現在では70～80のおたすけ先がありますが、日本の若い人々を迎えてくれるような家は数えるほどで、ほとんどの家庭では自分たちが生活するだけで精一杯のスペースしかない状態です。しかし、ここが良いとおっしゃるので、精一杯の準備でお迎えすることになりました。学生諸君には戸惑われたことでしょう。同じアジアの中にこんなに生活格差がありながら、元気に暮らしている人々が居ることが実感できただけでも大きな経験になったのではないかと思います。

天理大学の皆さんがお見えになったお陰で市長さん、大学の校長先生などとお会いし、当出張所の存在が大きくなりました。今後は一日も多く人としても、サンタローサの文化活動の中にも飛び込んで生きたいと考えています。勿論そのような事は、以前より考えていたことではありますが、きっかけをお与え頂いたと思っています。天理大学の学生諸君が今回のような目的の為に海外の地を訪れて下さる事は、受け入れる側にとっても意義のある事と申し上げておきます。

さて、天理大学の創立の目的はご存知の通りですが、私が大学生の頃には、在学中に海外渡航経験を持つという事は、ほとんど不可能でした。現在は本当に良い時代になったと思います。しかし、学生諸君が海外で学びたい事、行動したいこと、又、外国の方々に理解して頂きたいこと、伝えたい文化、思想等を持つことが今求められていると感じます。

これからも、このプロジェクトが継続されてゆくならば、そのような意味を持ったものにして頂きたい。更には、訪れた土地と有機的な関係を続けるような動きになればと、陰ながら声援を贈ります。

末筆ながら、学生諸君が礼状や写真をお送り下さり、中には誕生プレゼントまで贈られた方もありました。頂かれた方々は大感謝です。サンタローサのホストファミリーの方々に代って篤くお礼を申し上げます。有難うございました。

「国際参加」プロジェクト報告書刊行に寄せて

天理教フィリピン出張所長 山岸 精治

この度は、「国際参加」プロジェクトを当地フィリピンで実施いただき誠にありがとうございます。サンタローサ地区でのホームステイにはじまり、1991年のピナツボ火山噴火の被害からまだ復興しきれていないアンヘレス地区にある小学校でのリコーダー指導、事前に日本国内にて、リコーダーの練習また現地でコミュニケーションを考える上から、フィリピン語の研修をされて臨まれました。地道な活動で、形としては短期間では成果が見えませんが、どちらの地域のこどもたちにとっても、将来の大きな夢と希望を与えてくださったと確信しております。

当初このプログラムの担当の先生から電話をいただいたおり、「今年はフィリピンで国際参加プロジェクトを企画しております。このプログラムは当大学の建学の精神に基づいて企画されております。」とのことでした。私は、はっとしました。最後の部分、陽気ぐらし建設に寄与する人材………しか浮かんでこなかった。卒業生としてこれは申し訳ないことだと、今一度天理大学の建学の精神が掲載されていそうな本を探し出し、読み直してみました。

親神は、「陽気ぐらし」を共に楽しみたいと思召されて、人間世界を創造された。教祖は、この元なる親神の存在と、世界一れつきょうだいの真実を明かし、「ひながた」の道を通して、互いにたすけあう生き方を示された。本学は、教祖の教えに基づいて、「陽気ぐらし」世界建設に寄与する人材の養成を使命とする。

そしてこの建学の精神を読み返しているうちに、いま一つ復元という言葉が思い浮かんできました。このお言葉は、二代真柱様が生涯を通しておっしゃったお言葉です。元に復する。教祖御一人のひながたにもどるということ。天理大学が建学された当初の精神に立ち返り、その精神に基づいて計画をされたプログラムであるということ。つまり、互いに助け合い陽気ぐらし建設に寄与する人材養成の為のプログラムであるということが、元になっているということでした。約80年脈々とその精神が引き継がれ、活動の中に生かされていることに、感動をし、卒業生としてその精神を忘れずに御用につとめさせていただこうと、あらためて誓った次第です。

フィリピンに着いた日の顔と、プログラムを終え帰国する日の学生諸君の顔は明らかに違って見え、たくましく輝いておりました。そして、当地で一生懸命布教している教友たちに迷惑をかけてはいけないという思いから、禁酒禁煙を誓い実行してくださった学生たちに感謝し、刊行に寄せての言葉とさせていただきます。ありがとうございました。

8. ハロハロの国フィリピンへ！

天理教海外部翻訳課フィリピン語班 濱田 誠

よくフィリピンはハロハロの国だといえます。深めの器にかき氷を入れ、様々なフルーツ、カラフルな豆、ウベという芋を練ったもの、アイスクリームなどをのせ、そこにコンデンスミルクをかけたものです。しかし、このままでは本当の意味でハロハロとは言えません。それをスプーンでぐちゃぐちゃにかきまぜてから食べるのです。

ハロハロの語源は、フィリピン語の「混ぜる」という意味の「ハロ」を2回繰り返して強調させたつまり「ごちゃまぜ」という言葉から来ています。器に入ったものをぐちゃぐちゃにかきまぜて初めて「ハロハロ」なのです。そう、フィリピンは「ごちゃまぜ」の国なのです。いろんな地域の影響を受け、それを自分達のものとして取り込んで形成された社会、文化、風俗、それがフィリピンにあるのです。アジアっぽいところ、アメリカっぽいところ、ラテンののりをかんじる面、スペインっぽい面、中国風。訪れた場所や地域、出会った人、状況によっていろんな面が見えたと思います。また、同じシチュエーションでも受け取る人間によって、感じ方もちがったかと思います。

出発前に計3回にわたる事前研修会で、フィリピンに関して或いはフィリピン語の挨拶を教えさせていただきました。また、インターネットや図書館でいろいろ情報を得た人もいます。しかし、みんなが直接コミュニケーションの中で覚えたいろいろなフレーズ、更に、出会いを通して見たこと感じたことの方が強く印象に残っていると思います。人それぞれで感じ方は様々でしょうが、一人ひとりが向こうで出会った人、手に触ったもの、体験したことから感じたその思いを大切にしてほしいです。そして、それが一人ひとりの人生、生き方、今後の進路に活かされてこそ、今回のプロジェクトが意義あるものだったと言えると思います。

また、何か行動を起こすということは、その実現の為に多くの人の協力を必要とします。大学の先生、リコーダーを教えてくれた先生、ホストファミリーとなったサンタローサのみなさん、訪問を受け入れてくれた学校・施設の方々、アンヘレスの子ども達、裏方にまわってこのプロジェクトを支えてくれたの方々。いろいろな人の協力、支援があって、この「国際参加プロジェクト」が出来たのです。多くの人にお世話になったことに対して感謝の心を忘れず、そこで得た感動や喜びを今度は多くの人に伝える、それが大事だと思います。

フィリピンから帰国後のみんなと話をする機会を得ましたが、みんなは、ああだった、こうだったと本当に嬉しそうに楽しそうに話ししてくれました。私には、ありがたい言葉そのものよりもみんなの笑顔が嬉しかったです。あの笑顔をもっともっとたくさんの人にみせてやってください。フィリピンの輪を広げていきましょう！！

9. リコーダーとの出会い、そして・・・

天理中学校教諭 米田 道治

私が初めて「リコーダー」と出会ったのは小学校4年生の時でした。当時の音楽の授業は、小学校ではハーモニカ、中学校でソプラノリコーダーを用いていました。母親の実家に帰省した時、やはり帰省していた1つ上の従兄弟と一緒に、リコーダーを買ってもらったように記憶しています。そのお兄ちゃんは東京に住んでいて上手にリコーダーを吹いていました。私も面白半分に吹き始めたのをよく覚えています。今から思えば「タンギング」も知らずにただピーピー吹いていただけでしたが、お兄ちゃんのように上手になりたいと思ってました。日が過ぎて中学校に入学。他の連中よりも早くからリコーダーを持っていたからか少し上手に吹けるのが嬉しくてますます吹きました。音楽の授業で初めて「タンギング」を習って感激したのも懐かしい思い出です（笑）。

中学校では「水泳部と柔道部と吹奏楽部には絶対に入らない」と決めていた私でしたが、気がついてみると吹奏楽にはまり、音楽の教師になってしまっていました。今もドブプリとはまったまんまです。

今回、大学生のみなさんに教えて欲しいという依頼を受けて本当は困っていました。プロジェクトの主旨には大いに賛同したのですが、何をすればよいのか見当がつきませんでした。何せ普段は中学生相手に、教えているのか怒っているのかわからないようなことをして遊んでいるのですから。そんな時に思い出したのが、少しお話ししましたが私自身が指導を受けた「ある先生」のことでした。中学生みたいに何から何まで世話をしなくても、自分たちで考えて行動できるのが大学生だ。悩まなくていいから自分も楽しみながらやれよ・・・そんな声が聞こえてきました。

学生さんたちにとって私の授業がどうだったかはわかりません。でも私自身は楽しく過ごすことができたし、新しいいろいろな発見もさせていただきました。わずか3回ではありましたが（1回忘れてしまったのは申し訳ない！！）、ありがとうございました。腰ももう大丈夫です（笑）。リコーダーのおかげでみなさんと出会い、リコーダーにも感謝せねばなりません。

学生さんたちはこれからが人生の本番といっても過言ではないかと思えます。積極的にいろいろな活動をして素晴らしい道を創って行って下さい。本当にありがとうございました。「天理中学校吹奏楽部ホームページ (<http://www.s1.inets.jp/~y-miciharui/>)」を運用しています。時間があればお越し下さい。

10. 寄稿—教学協同の教育プログラムへの期待

天理大学 庶務部長 安藤 勇作

天理大学の「国際参加」プロジェクトは、本学が平成14年度からの学部・学科の改組や事務機構改革を進めていくなかで、おやさと研究所で立案したパイロットモデルをもとに、互いにたすけ合う献身的体験を通して広く教養を培い、さらに「教学協働」の理念を実践に移し、校名発揚と建学の精神を実践するプログラムとして、「インド西部地震救援協働プログラム」という形でスタートしたのがその始まりである。どんな場合でもそうであるが、従来になかった新しい発想に基づいたプランが提案された場合、色々な会議体で相当慎重な議論がなされるものである。それが、学生参加による海外地域、しかも災害救援の活動となればなおのことであり、関係者は学内並びに法人の理解を得るために、相当エネルギーを要したと推察する。

その後学内と法人の承認を得て、現地での事前調査を済ませた後、教職員・学生に参加を呼びかけ平成13年8月に第1回目を実施しているが、当時地域文化研究センターはまだ発足しておらず、参加学生の単位認定も制度化されていなかった中でのスタートである。その後、回を重ね平成16年に第4回目として、実施場所もインドからフィリピンへと変わった。参加学生も毎回替わっていくが、大学改革のひとつの柱として、「国際参加」プロジェクトがあったといえると思う。

社会に対して広くアピールしていけるプロジェクトであるから、その地道な継続的活動に期待したい。

天理大学 文学部長 仁尾 雅信

「人を救けるのやで」。天理教教組中山みき様は、親神様のご守護に感激しお礼の方法を尋ねた信者にこう語られた(『稿本天理教教祖伝逸話篇』100)。本学の建学の精神の根本は、このお言葉の実践教育にあると私は考えている。

地域文化研究センターが行なっている国際参加プロジェクトは、この教祖のお言葉の具現化に向け「他者への献身」を合い言葉に、教学協働のプログラムとして企画実践されている。「救ける」行為には宗教性の心の涵養が必須であり、「人」救いの拠点を国外に置く場合には国際性が不可欠である。宗教性と国際性の両者が統括された実践教育の場がこの本プログラムであるといえよう。

本プログラムの実践がいかに参加学生たちを心底から変えたか、それは、この『報告書』に書かれた学生たちの文字を一文字ずつ追うことにより確認される。教室の授業とはひと味違う、学生を教育により変貌させる大切な要素を読み取ることができる。

「国際参加」プロジェクトのこの着実なあゆみこそ、来春創立80周年を迎える本学が更なる飛躍を遂げるための基盤となる。

第二部

(資料編)



子供達からの手紙やプレゼント



ACKNOWLEDGMENT

The Administration and Teaching Force of Malabanas Elementary School wish to extend their deepest and sincerest gratitude to Tenri University (Nara, Japan) and University Center Foundation who have unselfishly extended their generous support to our school children.

MARAMING SALAMAT PO!

REPUBLIC OF THE PHILIPPINES
Department of Education
Region III
Division of City Schools
West District
MALABANAS ELEMENTARY SCHOOL
Angat, City

CULMINATING ACTIVITY

PHILIPPINE SCHOOL PROJECT 2004
A Project of Tenri University - Nara, Japan
in cooperation with
University Center Foundation

Date: August 14, 2004 (Sat.)
Time: 1:30 - 3:00 p.m.
Venue: MES Quadrangle

To be held at _____
(An Invitation)

PROGRAMME

- S**tating our praise and thanks to our Lord God
Miss Helen E. Del Mundo - Grade IV Adviser
- A**sking everyone to give respect to the Philippine/Japan flag
Mrs. Marietta D. Maniago - Grade II Adviser
- L**eaving inspirational message and words to ponder
Mrs. Angelita G. Ronquillo - School Principal
Dr. Antonieta B. Florulo - City Schools
Division Superintendent
- A**ttracting our attention by the talented Japanese friends,
MES Teachers and Pupils
- M**aking our Japanese friends feel that they are indeed appreciated
by giving them Certificate of Appreciation/Distribution of
Certificate of Completion to MES Pupils
Dr. Antonieta B. Florulo & Mrs. Angelita G. Ronquillo
- A**ffecting their hearts with our Song of Thanks
MES Teaching Force and now it's
- T**ime to say "SAYONARA"
Mrs. Leonora C. Paslon - MESTC President
Mrs. Leonida K. Quinto MM
Emcee

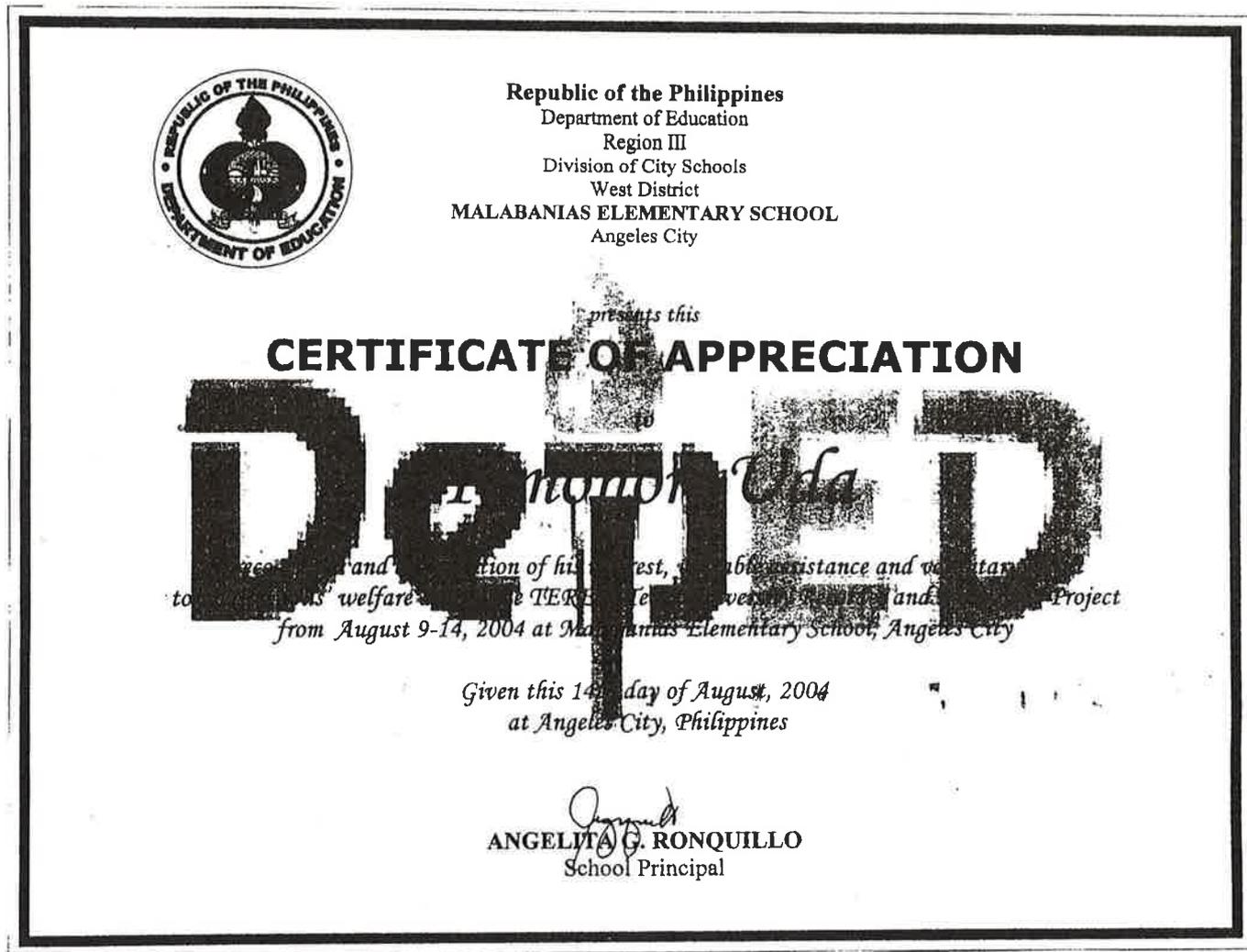
TENRI UNIVERSITY STUDENTS

| | |
|------------------|--------------------|
| Hiroaki Takagi | Shunsuke Nishimura |
| Chikako Nawate | Hiroko Minami |
| Manami Wakamura | Lee Sangun |
| Masayuki Inoue | Mami Noda |
| Noriaki Sakagami | Masataka Mizutani |
| Tomonori Uda | Sachiko Semba |

Akira Kaneko
Toshihiro Sawayama
Kyo Yongbin
Ricci Lalie
Coordinator - University Center Foundation

感謝状

マラバニヤス小学校から本学生徒へ



寄付して下さった皆様へ



Tenrikyo International Network for Mutual Help
天理教国際たすけあいネット
通信 No. 24

発行日：2004年11月26日
発行者：天理教海外部「国際たすけあいネット」
住所：〒632-8501 奈良県天理市三島町271
Phone：0743-63-1511（内線）5361
Fax：0743-62-0227
E-mail：tnet@tenrikyo.or.jp

ホームページ：http://www.mahoroba.ne.jp/~kaigaibu/T_NET/index.html

天理大学「国際参加プロジェクト」
フィリピンの子供達と心のふれあい

第4回「国際参加プロジェクト」（天理大学地域文化研究センター主催）が、8月4日から13日間の日程で行われた。本年は教員や学生15名が参加し、フィリピン・ピナツボ火山噴火被災地の小学校で、リコーダー指導を通じて教育支援活動を行った。

今回の特徴の一つは、東本サンタロサ出張所（代表：上田和興氏）の協力を得て行われたホームステイ。同出張所はこの受け入れのため、現地教信者や地域の人々と相談し、協力を求めると共に、学生のために「安全対策などの注意事項」、「ホームステイ家族写真」、受け入れ側のために「受け入れ準備事項」などを作成し、入念な準備を行った。

フィリピン人のホスピタリティのお陰もあり、学生はホームステイ家族に非常に上手く溶け込み、互いの親交を深め合った。その他、市長表敬訪問、職業訓練校との交流、ひのきしんなどを行い、短期滞在にもかかわらず貴重な経験を積むことができた。



フィリピンの子供達によるリコーダー演奏発表会
地域、布教拠点、大学の相互理解と協力により行われたこの活動は、天理大学が掲げる「教学協働」の精神が具現化された一つの姿といえる。

参加者の感想

感動の2週間でした。今回一番の目的はリコーダーの指導であり、最後の発表会で子供達が緊張しながら演奏していた光景は、今でも強く心の中に残っています。フィリピンの人々と接する中で得たことや、感じたことはこれからの自分の人生に大きな意味をもってくと確信しています。またホームステイ体験の中で、フィリピンの日常生活を肌で感じることができました。そのような中、改めて強く気づかされたことは、物を大切にすることでした。私が泊まった家では、シャワーがなく体を洗う時も井戸から水を汲んで洗っていました。家族の人達も水を大切に使っていました。普段、物が溢れて、新しい物が次々と生み出されている社会の中で生きている自分にとって、慎むという言葉の意味を体で感じるできました。それは本来人間が人間として、いつも心に留めておかねばならないことであり、また忘れがちなことでもあると思いました。（天理大学 ヨーロッパ・アメリカ学科 英語コース 坂上典明）

2004年9月23日に大阪国際交流センターで開催された『英語スピーチコンテスト』で仙波佐知子さんが大阪・シカゴ協会会長賞を受賞した際の原稿です。

“SALAMAT”
Semba Sachiko Tenri University

Emerson, Rommal, Kenjie, Edren, and James.....These are the names of the children I met in Philippines and I can still see their radiant look in my eyes and I can still hear their laughter in my ears.

During this summer vacation, I took in “the international participation project” organized by my college, Tenri University. The content of the project was to teach Filipinas pupils how to play recorders, because they have almost no opportunities for taking music classes.

Teaching school, this was not before in my life. At first I felt nervous before pupils, but when the class was over, I always felt accomplishment, and I was happy to hear children say thank you for us. Everyday when we walked in the school, every child smiled to us, called our names and greeted us cheerfully.

As the classes are proceeding, not good at English but active students became to play important rolls. To see them, I realized again that our attitude, personality and our own charms are much more important than language skill in people-to-people exchange. For example, when children were so keen on playing recorders and didn't listen to us, a senior student made children hold recorders like this and began to sing and dance. He was putting real communication in practice. In other times, during a break, while I was having a chat with several kids, he was showing Japanese “Hige dance”. Many kids were following him and were dancing together. They were really enjoyed one another without conversation.

Having said that, I appreciated that I had a little English speaking skill. Since English was foreign language for both of us, we really enjoyed talking without any hesitation. Also I was able to find my roll in my group, helping them contact with local people.

The last day was pupils' recorder recital. Some class did very well and others didn't. When the very last goodbye was coming, several kids came to me and gave me letters. They said they missed me. They were the kids I often talked with and I have remembered all their names. Seeing their tears keep filling their eyes, I felt I made a communication of heart with heart, too, though I was not such a big wheel. I recalled someone said to me, “There must be your secret admirer, too.” So laughter wells up in me.

Philippines is a cheerful, jesting and easygoing country. But it has many problems, also, for example, financial poverty. A teacher I met at the elementary school was an educated, kind and nice person. However, his salary is cheaper than my allowance from my part time job. Comparing his academic skill and his personality with those of mine, the gap of payment is really strange. Is there anything I can do for the problem?

Learning from communication in Philippines, I'd like to be honest to people and my own feeling and I want to became open-minded person. SALAMAT means thank you in tagalong. I want to say Salamat to kids who directly expressed their feelings, to all people I met in Philippines, to my friends who carried on this project together, and teachers who let us. I learned too many things to describe in words. Thank you very much! To develop my experience, to know more about Philippines and to see the kids and their teachers, I will go back to Philippines again in near future.

主催：大阪・サンフランシスコ姉妹都市協会、大阪・メルボルン姉妹都市協会、大阪・シカゴ協会

SALAMAT

エマソン、ロマール、ケンジ、エドレンにジェイムズ・・・彼らはみんな私がフィリピンで出合った子供達です。今でも、彼らの輝く姿が彼らの笑い声と一緒に目に浮かびます。

この夏休みに私は、天理大学が企画した「国際参加プロジェクト」に参加しました。プロジェクトの内容はフィリピンの小学生にリコーダーを指導するというものです。というのも、現地の小学校では音楽の授業が行き届いていないからです。

私にとって先生になるのは初めての経験で最初は緊張しました。でも、終わった後にいつも達成感や充実感を味わいました。授業の後には子供達、皆がありがとうと言ってくれて嬉しかったです。毎日、私たちが校内を歩くと、どの子も私達に笑いかけ、名前をよんでくれて、元気にあいさつしてくれました。

授業が進むにつれて、英語は苦手でも人前で何かすることが得意な生徒が中心に授業を進めるようになりました。彼らを見て、人とのコミュニケーションにおいて、語学力よりその人の態度や性格や魅力のほうがずっと重要なんだと改めて実感しました。例えば、子供達が笛を吹くのに夢中でなかなか話を聞いてくれなかったとき、ある先輩は笛を生徒にこんな風に持たせて、彼自身が歌って踊って子供達の注意をひきました。彼は本当の意味での交流を実践していました。また、ある休み時間中、私はそのへんの子供達を集めて、たわいも無い話をしていましたが、その先輩はひげダンスを踊っていました。たくさんの子供達がそれに続き、一緒に踊って、わらって心から楽しそうでした。

そうは言っても、英語を勉強していてよかったと思っています。英語はお互いにとって外国語であったので、間違いを気にすることなく、会話を心から楽しむことができました。また、現地の人と連絡をとるなど、グループの中で、自分の役割を見つけることができました。

最後の日は発表会でした。結果は思った以上にすばらしいクラスがあったり、できなかったクラスがあったり。本当のお別れの時がきたとき、何人かの子供達が私のところへ来て、私がいなくなると寂しいと手紙をくれました。彼らは休み時間によく私と話をしていた子供達で、名前もすっかり覚えていた子供達でした。目に涙をいっぱいためた彼らを見て、先輩のような人気者ではなかったけれど、自分も心の交流ができたと感じました。前に、誰かが「仙波さんにも隠れファンがおるって」と言っていたのを思い出し、笑いがこみ上げてきました。

フィリピンは、明るくて、冗談好きで、大らかな国です。しかし、問題もたくさん抱えています。例えば、金銭的、貧しさ。小学校で仲良くなった先生は、教養があって、優しく、親切なすばらしい人でした。でも、彼の一ヶ月の給料は私が一ヶ月バイトで稼ぐよりも安いのです。彼の学力・人格と私のそれを比べて、その賃金の格差を考えると、本当に変な気持ちになります。私に何かできることがあるのでしょうか？

フィリピンで経験した心の交流をいかして、私は人に対して、誠実であろうと思います。そして自分の気持ちに素直でありたいです。SALAMAT(サラーマット)はタガログ語でありがとうという意味です。ストレートに気持ちをぶつけてくれた、子供達、フィリピンで出合ったすべての人たち、一緒にがんばった天理大学のメンバー達、引率して下さった先生、私は言葉では言い切れないたくさんのお話を学びました。SALAMAT!

私は、自分をもっと成長するために、もっとフィリピンを知るために、あの子供達や先生にまた会いに、フィリピンに必ず戻ります。

帰国後、現地の小学校から学生に届いたe-メール

Know what? Last October 18 we celebrated UNITED NATIONS DAY, the GRADE FOUR pupils performed playing on the recorder.

They played medley, IT'S A SMALL WORLD, SILENT NIGHT, and others. We now have new piece to perform. We teachers have regular practice day every Friday using the recorder, but at times we were quite busy with our teaching schedules so missed practice lately. Hope you could send me those pictures...

can you just send them at home? Regards to all your friends who had gone here in our school...we're looking forward for your second coming, hope it wont be that long... thanks... take care... until next..

Miss u all guys.

<訳>

去る10月18日、私たちは“United Nations Day”を祝いました。その時、4年生の生徒たちは“it's a Small World”や“Silent Night”など今、私達が練習している曲をメドレー演奏しました。私たちは、毎週金曜日にリコーダーの練習をしています。しかし、忙しい日が続くので予定通り練習ができない時もあります。みなさんに一つだけお願いがあります。それは、8月の「国際参加プロジェクト」で皆さんに撮って頂いた写真を送って頂きたいのです。私たちの学校に来てくださった、すべての方によろしくお伝え下さい。また皆さんとお会いできる日を心待ちにしております。その日が近いことを願って……。それでは、お体を大切に！

ごきげんよう！

マラバニャス小学校職員代表

<編集後記>

編集に初めて参加しました。とても大変でしたが、良い経験ができました。野田

帰国してからも、みんなで協力して編集作業を進めました。フィリピンで培った団結力の証だと思います。西村

それぞれのプロジェクトの経験が終結したすばらしい報告書になると思います。宇田

たいした事はやっていないと思う今日この頃、編集スタッフのおかげで、こんなにもすばらしい人生の宝物が誕生したことを誇りに感じます！坂上

編集長をはじめ、携わった皆さんに感謝します。改めて、フィリピンありがとう！啜

このプロジェクトも文集作りも、みんなが初めての体験であったと思う。初めて自分たちで作った文集にとっても愛着がわく。とても良い文集になった。この文集にはフィリピンでの体験がすべて詰まっている。井上

文集作り、フィリピンで実際にリコーダーを指導するのも楽しかったけど、みんなで思い出話をしながら編集するのもとても楽しかったです。やっとできたー!!!高木

文集作りをすると、そしてみんなの感想文を読むと、フィリピンでの出来事を思い出さずにはいられない。この文集はこの後の自分の人生の宝物!!一生大事にします!!水谷

編集作業がこんなに大変だとは思いませんでした。李

このプロジェクトを通して、相手国フィリピンの子供たちやその他の方々に喜んでもらえ、改めて参加型国際貢献の重要性を感じました。中村

編集係の李さん、啜さん、井上君、本当にありがとう。また、中心になって協力してくれた野田さんをはじめ、分担作業に携わってくれた皆、心からありがとう。そして、頼りない自分をいつも支えてくれた高木さんなしでは文集は完成しませんでした。常に適確なアドバイスをくださいながら、遅々として進まない文集作りを温かく、気長に見守ってくださった澤山先生や金子先生、地域文化研究センターの先生方に感謝いたします。最後に、直接にはお会いできませんでしたが、協力してくださった全ての皆様にお礼申し上げます。

仙波

